王妃様は逃亡中

遊森　謡子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王妃様は逃亡中

【Ｎコード】
Ｎ１２４７Ｙ

【作者名】
遊森　謡子

【あらすじ】
『異世界から召喚された黒髪黒目の女性は、その国の王妃になり世継ぎを生みましたが、郷愁の思いに耐えかねて元の世界へ帰って行きました』。そんな筋書きになるはずだったんでしょうねぇこの状況。「あなたの役目は終わった、元の世界に帰れ」？　じょおっだんじゃない、日本に帰るのなんかまっぴらごめん！　強制送還回避のため城からの逃亡を余儀なくされたけれど、実は日本での経験から「逃亡慣れ」していた王妃。さてどうする？　２０１１．９．９．に投稿した短編『王妃様は逃亡中』の長編版です。

プロローグ（前書き）

短編版『王妃様は逃亡中』、たくさんの方に読んでいただき、さらに続編リクエストいただきありがとうございました！　長編版スタートです。あの短編の背景とその後を、ぜひお楽しみ頂ければと思います♪

プロローグ

たった二十数年生きてきただけの人生だけど、幸せなんて長くは続かないものであることを、私は身をもって知っていた。
まさかそれが日本でも異世界でも通用する法則だったなんて、知りたくもなかったけどね！

絶体絶命の状況で、私は目の前の男にガンを飛ばしながらそんなことを考えていた。
「王妃様、立派にお役目を果たされたこと、国民を代表してお礼申し上げます。心おきなく、元の世界にお帰り下さい」
目の前の男、祭司長のグレッドが恭しい手つきで、王妃――つまりこの私――の後ろを指した。

背後の大理石の床には、魔法陣が紫色にぼんやりと光っているはずだ。さっき聖堂に入った瞬間に見たからね。
私が日本からこの世界に召還されてきたときの魔法陣とは、微妙に色が違うだけでよく似ている。それに気づいた時にはもう遅くて、数人の僧兵を従えたグレッドが聖堂の入口を封鎖していたのだ。

「世継ぎを生んだら、私は用なし？」
魔方陣を背にした私は、隙をうかがいながら言葉をぶつけた。
くっそお、こいつ初めて会ったときから、なんか企んでるとは思ってたのよ。日本での逃亡生活で磨いた直感を信じればよかった、あれから二年経ったとはいえ私もヤキが回ったわね。
「これはこれは……私は僭越ながら、王妃様のお悩みをお察ししたまでです。生まれ育った場所にお帰りになりたいでしょう？」
聖堂の、夜空を透かした水晶の天井に、グレッドの低い声が反響する。

じょおっだんじゃない、もう日本なんかまっぴらごめん！

両親も健在、犯罪者でもない私が、なぜ日本脱出にそんなに喜んだのか。

それは、父が大物政治家で母は有名女優という生い立ちに原因がある。そう、私はいわゆる隠し子で、日本ではマスコミに追い回されていたのだ。

そんな中、この国ハーヴェステスに召還されて穏やかな生活を手に入れて、私がどんだけ喜んだと思ってんの？

「祭司長殿は私に、国王陛下と愛する王子を置き去りにして、帰れとおっしゃるの？」

馬鹿丁寧に尋ねる。

アレ、今「愛する」が「王子」にしかかかってなかったような。まあ細かいことはいっか。

「ご安心下さい、幼い王子様は私が後見して、立派な王太子にお育て申し上げます」

しゃあしゃあと言い放つグレッドは、紫の祭司服に銀の鳴杖（めいじょう）を手にしている。理知的な瞳が、意味ありげにこちらを見つめていた。

王子を操って、自分が実権を握るつもりね。ハッ、なんて分かりやすい悪役っぷりなの。それにしても、私が邪魔なだけなら何で殺さな……はっ！

「まさかこの陣に入ったとたんに私、死ぬとかじゃないでしょうね！　だいたい帰還の陣があるなんて、聞いたことないわ」

「それは王妃様が、帰る方法について一度もお聞きにならなかったからです」

ハイそーでしたー！

「でも、なんでこん」

「ご心配には及びません」

理由を聞こうとした私の言葉に、グレッドはおっかぶせるように言った。
「王妃様は産後ウツのために、私に頼みこんで魔法陣を発動させ、元の世界にお帰りになる。お優しい陛下だ、そんな理由なら納得して下さるでしょう。後顧の憂いなくお発ち下さい、さあ」
僧兵たちとともに一歩踏み込んできた、その準備万端のドヤ顔がムカつく。ピンヒールのかかとで踏みつけてやりたい、ていうかやる、いつか絶対やる！
私はそう決意しながら、さらりと言った。
「あらそう。それじゃあ、アレは何なのかしら？」
聖堂の入り口の方を指さすと、グレッドはとっさにそちらを振り向いた。

その瞬間、私はくるりと魔法陣の方へ向き直ると、数歩の助走で一気に――魔法陣を飛び越えた。
これでも学生時代は、幅跳びでインターハイ出場したんだからね！
「シーゼ様！」
グレッドがあわてた声で、こっちでの私の名前を呼ぶのを背中で聞きながら、祭壇の後ろに回り込む。指先が床のわずかな引っかかりを探し当て、私は隠し扉を引き開けると飛び降りて扉を施錠した。
この王城の中の王族用逃走経路はとっくに確認済み！　日本での逃亡生活をなめんなよ！

私は太股にベルトで巻いてあったジッポ（日本から持参した品の一つ。あ、こっち来てから禁煙したけど）に火をつけると、暗い石造りの通路を一気に駆け抜けた。えーっと、右・左・左・もっかい右っ。
突き当たりの壁に寄せて、用意しておいた大きなショルダーバッグが置いてある。その中からごく普通の綿シャツとスカートを引っ張り出して着替え、ポンチョみたいな外套を羽織ってフードをかぶ

った。
バッグを肩にひっかけると、頭上の上げ蓋を押し上げる。
そこは王城の裏手の森だった。この出口のことは、グレッドは知らないはず。
黒々とした梢の隙間から夜空を見上げ、星に方角を尋ねて、私は走り出した。
くっそぉ、絶対に王妃の座に返り咲いてやるから覚悟しとけ！
息子よ、ミルクは飲んでもグレッドの言うことは鵜呑みにするな！
夫よ、あんたもだ！
……って、こっちの世界でも結局、逃亡生活か！

1　王妃召喚（前書き）

1話目と2話目は国王視点です。

1　王妃召喚

「妃が『帰った』？」

帰城早々、祭司長から内密の話があると言われて人払いした執務室。余は、平伏するグレッドの言葉に思わず立ち上がった。

「余が城を空けている間に、何があったのだ」

「は……昨夜、王妃様が私の部屋へ、供もつけずにおいでになったのです」

グレッドは、床に着けていた額を少しだけ浮かせて言った。

「そして、『やっぱり国母なんて無理。もう帰る。帰還の陣を開いて』とおっしゃりながら……短剣を首に」

「わが身を盾に、そちを脅したのか」

「いえ、短剣を私の首に」

であろうな。自分が死ぬより相手を殺す女だ、妃は。

「他にも、『ここにいたら二人目産む羽目になるかもしれないじゃない。あんな痛いの一回だけでたくさん、もうヤダ』とおっしゃって」

うむ。確かに先日王子を出産する真っ最中に、「二人目なんか絶対産むもんかー！」という叫び声を城中に響き渡らせていた。

「しかし……にわかには信じられぬ。妃はニッポンには帰りたくないと常々……」

逡巡する余に、グレッドは再び額を床にすりつけた。

「他にも『世継ぎを産んだら私は用なし』とつぶやかれ……お心を病んでおられたのかもしれません。それに気づかなかったのは私めの不覚」

その言葉に、余は一瞬言葉を失った。グレッドは続ける。

「しかし、帰還の陣に入る直前には、陛下と王子殿下の今後を心配なさっておられました。申し訳ありません、お止めすることができず……」

余は執務机の椅子にもう一度深く腰掛けると、額を押さえた。

「……少し、一人で考えたい」

「は……」

グレッドはゆっくりと立ち上がると、

「私は聖堂で謹慎しております。いかようにも御処分を……」

と言い残して執務室を出て行った。

おかしい。何かがおかしい。妃らしくない気がするのだが……。

余は、妃と初めて出会った頃のことを思い返した。

◇　◇　◇

たった二十数年生きてきただけの人生だが、人間しょせん打算で生きていることを、余は身を持って知っていた。

それは、我がハーヴの地でも異世界ニッポンでも通用する法則であったらしい。

余は、ハーヴェステス王国の当代国王である。

我が国の王室には、節目の代の国王が王妃を異世界から迎えると、その子孫が国を栄光に導く、というカビの生えた言い伝えがあった。百二十代目の曽祖父が召喚を行ってから八十余年、次は百二十三代目の余が召喚を行うことになっていた。

異世界の女性を妻にするということは、この国の高貴な身分の女性を妻にしてその実家の後ろ盾を期待する、というようなことができない。そのため、節目の代に国王の座に就くことを「はずれくじ

を引いた」などと揶揄する輩がいることも知っている。

しかし、実は余は、この召喚制度を心中密かに歓迎していた。年頃になったら召喚が行われると決まっていたために、余の周りでは正妃の座を巡っての争いが起こったことがないからだ。

側妃についても、正妃を召喚した後で選定するか否かを決定すると告知してあったため、水面下では色々あったやもしれないが、表立っては平穏なものだった。

余は、父親である先代国王の妃たちの、醜い争いを見て育った。実の母である第二側妃が早死にしたのも、その精神的な負荷のせいだと余は思っている。

年頃の女たちは「張り合いがない」「女を磨く気概が薄れる」などと顔を合わせてはこぼしているようだが、余は父のように女たちの争いさえも利用して貴族どもの手綱を取る手腕も持たなかったし、誰か一人の女を愛して「妃は彼女でなくては嫌だ」などどいう波乱を巻き起こすような情熱家でもなかった。

後ろ盾を持たない妻を王妃として迎え、平凡な人生を送るという打算を実現できるなら、相手は異世界の人間でも全く構わなかった。

ただ、故郷のすべてから切り離されて、この世界へやってくる女性の悲しみだけは心配であった。どんな女性でも、せめて何一つ不自由ない状態で出迎え、希望を聞いて労わってやらねばなるまい。

祭司長や近衛騎士団長、女官長らと準備を進めながら、余は淡々とその日を待った。

そして、吉日を選んでついに召喚が行われることとなった。

聖堂は、建物の半分が水晶で作られている。磨かれ透き通った天井を見上げると、夜の闇に少しずつ朝の色が混じり始めていた。そんな、世界の清冽さを感じられる時刻。

射し初めた朝の光が祭壇に届き、さらに空になお残る明けの明星の光を鳴杖に戴く呪を唱えたグレッドが、祭壇の前で杖を水平に伸ばしてゆっくりと回転した。
最後に立てた鳴杖で床を一つ突くと、シャン、という澄んだ音とともに夜明けの冴え渡った空気が振動して、魔方陣が渦を巻くように光りながら開いた。
余は自ら指先に傷をつけると、陣の中へ手を差し出した。
ひとしずくの血が陣の中に落ちた瞬間、魔方陣が強い光を放った——。

光が収まったとき、召喚陣の中央に、余と同じ年頃の女性が立っていた。
化粧気のない顔はしかし整っていて、黒い瞳が賢そうな光をたたえている。黒髪は無造作に後ろで一本にまとめられていたが、素早くあたりを見回したその動作で、腰までの長さがあるのがわかった。地味な服の頭巾を後ろに垂らし、ズボンを履いている。
もう一度こちらに向き直った彼女の固い視線に、余はようやく我に返った。

すぐに祭司長が、魔精霊であるイルフレートを飛ばした。薄く柔らかい羽が何枚もある、書のような蝶のようなそれは、言葉の通じない他国人との交流の際に、通訳としての役目を果たす存在だ。一人の言葉の意味をもう一人の意識に働きかけて理解させる、文字通り『意思を疎通させる』能力を持っている。
彼女の髪の結び目あたりにふわりととまったイルフレートは、異世界人との間の意思も滞りなく疎通させてくれた。
「余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス……」
余が説明し始めるのを遮って、彼女は「話は聞くから匿ってくれ」という。しつこい男につきまとわれている所だったそうで、もう追われることはないと言ってやると、いぶかしげにしていた。

聖堂の応接室に場所を移し、この国の召喚の伝統を説明する。
「えーと……まあそういうファンタジーを読んだことがないわけじゃないけど……」
彼女は視線を宙にさまよわせ、しばらく黙りこくってから、
「まあ、夢なら夢でもいいか。覚めるまでひたってれば」
と妙な納得の仕方をしていた。
一応話を進めることにして、余が国王であり百二十三代目であることをもう一度説明すると、彼女は片方の眉を上げて
「なにそのキリ番イベント」
とつぶやいてから、うなずいてこう言った。
「うん、でも、もし夢だとしてもすごくいい夢だわ。いいよ、王妃になる」

2　王である証拠は“城”？

私と祭司長のグレッド、そして近衛騎士団長と女官長は、顔を見合わせた。

そもそもこの四人しか儀式に立ち会わなかったのは、召喚された女性が取り乱すこと前提で、その様子をむやみにさらさないためだったのだが……この落ち着き様は。

「わかっておるのか？　有り体に言えば、世継ぎを生めということだぞ？」

余が念を押すと、彼女は少し表情を緩め、もう一度どこかいとけない仕草でうなずいた。

「うん。私、その……ちょっとすさんだ生活を送ってたから、自分は結婚して子どもを生むなんて生活はできないと思ってたのよね。保護してもらえて、しかも普通の結婚生活を送れるなんて、嬉しいくらいよ」

国王との結婚を『普通』で済ませるか。

剛胆にもほどがある……いったいどんな生活を送っていたのだろう。

とにかく、彼女はその日眠っていないとのことだったので、一晩経ってから改めて気持ちを聞くことにして――と言ってもすでに朝陽が昇っていたが――聖堂に付属する塔の客室を与えて休ませた。

夕刻、聖堂に適当な用事を作って、こちらから彼女の元へ出向いた。

国王自らが出向くのはあまりないことではあったが、彼女から余に王城に会いに来させると目立ってしまう。この世界の人間はみな、

髪の色は白かそれに順ずるごく淡い色、瞳は紫に属する系統の色。彼女のような黒髪黒目は存在しないのだ。

壮年の近衛騎士団長とともに客室に入ると、窓辺に立っていた彼女が振り向いた。服装は召喚時と同じ。着替えなかったのか？

少し憔悴した様子に、奇妙な話だが余は安堵した。彼女もやはり一介の女人、やっと今の自分の状況を悟って混乱しているに違いない。

「具合が悪そうだが、大丈夫なのか」

余が先に長椅子に腰かけると、部屋にいた女官長が彼女を向かいの椅子に促す。彼女はこちらに近づきながら、軽くため息をついた。

「あまり眠れなくて。ここ、非常階段とか避難ハッチとかないわけ？　逃走経路確保しないで眠るなんて無理だわ、私」

「ひなんはっち？」

イルフレートがおおよその意味を伝えてはきたが……バルコニーに、穴？

彼女は余の様子には構わず、向かいに腰かけると余をまっすぐ見つめた。

「さっきは混乱してて、簡単に王妃になるなんて言っちゃったけど、その前に聞きたいことがあります」

やはりな、と余は思った。

あんなに簡単に、余の妻になることを了承するはずがないのだ。まずは何を尋ねられるか……元の世界への帰り方か、それとももっとしたたかに、交換条件として何かを要求してくるか。

彼女は言った。

「あなたが王様だという証拠は？」

「……何？」
聞き返すと、彼女はごく真面目な口調で言った。
「口ではいくらでも言えるものね、自分は王様だなんて。証拠を見せて下さい、証拠を」

一瞬呆気にとられてしまったが、それも確かにもっとも……か。

「そう、だな……王家の人間には、肩の後ろに十字のアザが」
「だから、それを見せられたところでアザが本物かどうかもわからないし、そもそも王家の人間にアザがあるって言うそれすら、余所からきた私には事実なのかわからない。王家の人間一列に並べて『ほら全員アザが』って言われても同じ」

「無礼な……！」
思わずと言った風に近衛騎士団長が口を挟んだが、彼女はちらりとそちらへ流し目を送った。
「だって、お互い困るでしょ。もしも王様の偽物が現れて、『余が本物の王様である、ほらアザもある、余の妻になれ』って言われて、私がそれ信じてそいつの子ども妊娠しちゃったらどうするのよ。お家騒動もいいところじゃないの」

団長が詰まるところを、余は初めて見た。

「まあ、窓からの景色を見る限り、さすがにここが王城なんだろうって言うのは信じます。すごすぎるもん、ここの建物群。あとは、あなたよ」
確かに、余は凡庸ゆえ、一目で王と分かるほどの威厳をまとっているとは思わないが……人間より建物を先に信じるか。
「どうしろと？」

興味深く思って尋ねると、
「ここが王城であるという前提でだけど、きっと王族専用の隠し通路とかあるんじゃない？　それをあなたが知っていて、教えてくれたら、信じられるわ」
彼女は挑戦的に余を見た。
「私が王族の一員になるなら、教えてもかまわないでしょ？」

聖堂に連れて行き、祭壇の裏の隠し通路を教えると、彼女はようやく納得したようだった。
「本当に王様なのね。じゃ、よろしくお願いします」
彼女はその時になってやっと表情を和らげ、初めて笑顔を見せた。
この女性は、美しい妃になるだろう、と思った。

しかし同時に、余は少し――ほんの少しだが、落胆していた。先代国王の妃の座を争っていた、女たちのことが頭をよぎる。
結局、彼女も、余が国王だからこそ、保護と引き換えにこうして打算で結婚するのか。

こちらが一方的に召喚したにも関わらず、余は勝手に夢を見ていたのかもしれない。
余のためだけに召喚され、余だけを見てくれる女性を。

◇　◇　◇

椅子を回し、窓の外を眺めた。彼女が一目で城と信じた、いくつもの尖塔を抱えた白い王城、それに付属する建物や庭園が、どこまでも広がる。

そう、余と妃は、本当の意味で心が通い合っていたわけではなかったのだ。

彼女が余に一言の相談もなく帰ってしまったのだとしても、責められるものではない。

「シーゼ……」

余は、彼女のこちらでの名を、静かにつぶやいた。

3　王妃様の黒歴史

はー、情けないけど何だか懐かしいよ、この逃亡生活。

私はせっせとオールで舟を漕いでいた。

城を脱出した後、いったん城下街に出た私は、貸し馬屋のおっさんを叩き起こして馬を一頭借りるという目立つ行動を取った。そして馬のお尻をひっぱたいて街道に放し（ごめん）、逃げたように見せかけておいてから、川に出て小舟で城を離れたのだ。

即座に多方面に追手がかかるようなことはないだろうと踏んでの行動だったけど、当たりだったかな？　だって王妃が元の世界に帰ったって見せかけたいなら、あまり大騒ぎにはできないもんね。犯罪者を追いかけるのとはわけが違う。

いやーしかし、王妃が手こぎボート漕いで逃げてるなんて、きっと誰も思わないだろうなー。

そう……二年前に日本からハーヴェステス王国に召還されたときも、私はやっぱり逃亡している真っ最中だったのよね。

私は日本での生活を思い返した。

◇　◇　◇

生まれてすぐに母方の祖母に預けられた私は、両親は死んだものと思いこんで育った。ところが十六の年、祖母がこの世を去る時に、とんでもない出生の秘密を言い遺したのだ。

私の父は大物政治家で、母は有名女優。私は、隠し子なのだと。

自分は両親の若いころの過ちでできて、そして捨てられた子だったのだ。それは、思春期の少女には重すぎる事実だった。

祖母の死後、寂しさも相まって私は非行に走った。煙草に酒は当たり前、男女問わずに知り合いの家を転々とし、夜の街をフラフラしては補導される。

当の両親はどうしてるかって？　毎日テレビで見かけてたから、生きてるのは知ってたけどね。

「ああ、今日も元気に汚職ってるな」「ああ、今度はお色気系の新境地開拓したのねオメデトウ」って、まあそんな感じ？

もしも今、自分が子どもだと名乗り出ても、父は党首選の真っ最中で足の引っ張り合いに利用されるだけだろうし、母は若いころのスキャンダルなんか封印したいに決まってる。

はいはい、もう勝手にやってちょうだい。むしろ表舞台から姿を消すような何かをやらかしてくれないかな、そうすれば私みたいな隠し子なんか、世間的にどうでもよくなるし。

そんな風に荒んでいた私が、かろうじて犯罪にだけは手を出さなかったのは、祖母の「親はどうあれ、あんたは何も悪くないんだから、自分を貶めちゃいけないよ」という遺言が胸にあったからだ。

おばあちゃん、大好きだったおばあちゃん。

でもね、一つ突っ込ませてもらうなら、私が静かな人生を送れるようにって『静子』って名前をつけてくれたけど、そりゃ無理だわ！

ある日、夜の街で酔い潰れた私は警察に保護された。その時に優しく諭してくれた警察官にほだされ、私は涙ながらに自分の素性をしゃべってしまった。

そしてその警察官は、うっかりだかわざとだか知らないけれど、雑誌記者に私のプライバシーを漏らしやがった、らしい。

翌朝警察署を出たところで、記者につかまりそうになったから。

警察官でさえ信用できなくなった私は、もうグレてる場合ではなくなった。このまま身を落としたところをフラ〇デーされて黒歴史

が暴露されたら、私みたいな小娘一人、簡単に社会的に抹殺されちゃうじゃないの。
高校だけは友人の助けもあってどうにか卒業したけれど、それは同時に私のギリギリな逃亡生活の幕開けでもあった。

名を変え仕事を転々として、数年の月日が流れた。
ある日の明け方、私は疲れた身体を引きずってアパートへの道を歩いていた。その頃は深夜のオニギリ工場で働いていたので、帰りはいつもそんな時間。
何でこの仕事を選んだかって、世間の人と違う時間帯に行動できて、さらに食品関係は仕事中に帽子とマスク着用だから顔が隠せるじゃない？　他人に顔の印象を残したくなかったのよね。

アパートが見えたあたりで、私はいつもの癖で、あたりにさっと目を走らせた。
そして、向かいの公園の植え込みに、首からカメラをぶら下げた人影があることに気づいた。
さりげなく一本手前の道を折れる。ちっ、とうとう家がバレたか。

こんな時間じゃ知り合いの家に転がり込むわけにも行かないし、ひとまず漫喫かファミレスにでも……と思いながら、尾行を警戒して工事現場の中を突っ切ったのがまずかった。地下駐車場か何かのための空間を掘っていたのだろう、大きな穴の上に足場が組んであるだけの不安定な場所に踏み込んでしまったのだ。
いきなり足下がぐらりと傾いだと思ったら、奇妙な浮遊感があって――

――次の瞬間には、いきなり足が床についてずっこけそうになった。
ほらアレよ、ぼーっと階段を降りていて、てっきりもう一段ある

と思って足を降ろしたらもう床だったっていう、あの時みたいな感じ。
おっかしいな、もっと落ちそうな感じだったのに。
そこは天井のめちゃくちゃ高いガラス張りの建物の中で、私は薄暗い中、ぼんやりとピンク色に光る不思議な文様の描かれた円の上に立っていた。
目の前には四人の人間がいて、そのうち三人は私を見た瞬間、一歩下がって恭しく頭を垂れた。
何だか全員、服装がおかしい。テーマパークの従業員みたい。
そして一人残った、一番立派な身なりだけど無表情な男が、ハッと我に返ったようにこう言ったのだ。
「あー……なんだったかな」
おい。
「ごほん……異世界からの花嫁よ、よくぞ我がハ」
「悪いけど、急いでるから簡潔に。あなた誰」
「……余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス。そなたは余の花嫁となるべく、今この場に呼び寄せら」
「話、長くなりそうね。聞いてあげるから、ちょっと匿ってくれない？　こんな広々とした場所じゃまずいんだわ、私」
私はハラハラしながらあたりを見回した。建物がガラス張りじゃ丸見えじゃないの、あいつ追いかけて来てないでしょうね。
そう、私はまだ自分が工事現場付近にいると思っていたのだ。暗いし建物あるし空が見えてるし。
フェザなんとかという男は、女がうらやましがりそうな大きな瞳を瞬かせた。いまいち頼りにはならなさそうだけど、いい男の部類

には違いない。
「追われておるのか」
そう聞かれ、犯罪者だと思われたくなくて、私は当たらずといえども遠からずな理由を付けた。
「変な男につきまとわれててね」
「それなら、心配ない。そやつは追って来れぬ」
彼は、カツラなのか何なのか、白銀の髪をさらりと揺らして口の端を少し上げた。
「そなたは、別の世界に逃亡したのだからな」
正直、変なのに関わっちゃったな、と思った。

◇　◇　◇

思い出に浸りながら機械的にオールを漕いでいると、やがて朝陽が昇って朝もやが晴れ、前方の川べりに町が見えた。
さて、これからどうしよう。フェザリオン――フェザーは今、新しくできた港の開港式典に出るために海沿いの町に出張していて、今日城に戻るはずだ。帰ってくるところをどこかでどうにか捕まえて、一緒に戻れば……。
ううん、悪いけどフェザーはあてにならない。実質、お城で一番偉いのは王太后様（つまり先代王妃ね）で、王様であるうちの夫ではないっていうあたりがすでに情けない。
そういえば、祭司長のグレッドは王太后様のお気に入りなのよね……思い出したらまたムカついてきたので、それは置いといて。
いくら王妃だとはいえ、私の立場なんか部屋の隅のホコリみたいなものだ。何で日本に強制送還されることになったのかわからないことには、城に戻ってもまたそのうち今回のように掃いて捨てられるだけだろう。今回のことを訴えてもグレッドはどうせしらを切る

だろうし、また産後ウツだなんだって言われて病気扱いされたらたまったもんじゃない。

生まれたばかりの可愛い息子、ウィンガリオンを思い浮かべる。フェザーにそっくりだと思うんだけど、フェザーは目つきが私にそっくりだと言っていた。時々睨まれるって。

息子に会えないのは辛いけど、王太后様が優秀な乳母をつけてくれたし、再会の時まであの子が大事にしてもらえるのは間違いないだろう。

親子の明るい未来のためにも、今は雌伏の時。まずは今後の対策を練らないとならないけど、私一人では心許ない。

こんな時に、たった二年前に異世界からやってきた私に、頼れる人なんかいるわけがないよ……。

……なーんて。いないこともないんだな！　これがな！

4　名誉の負傷

季節の変わり目になると、左の膝が痛む。
いつもの飲み屋の、いつもの席にどっかりと座り込み、俺は膝を伸ばしてさすりながらいつもの酒を注文した。
狭い店内の喧騒と人いきれの中、酔いが回ってくると脳裏に浮かぶのは、かつて仕えていた主――ハーヴェステス国王妃、麗しきシーゼ様の黒い瞳。
怪我で退役した今でも、お守りしたいと願うのはシーゼ様ただ一人だ。

◇　◇　◇

異世界から女性が召喚されたという発表があった翌日、俺はその女性専属の警護職に着くことになった。
たぶん、俺がそれほど職務に熱心でないから、選ばれたのだろう。
異世界人の女性は、世継ぎを生む大事な身体ではある。しかし、彼女はこの世界に降ってわいた、良い意味でも悪い意味でも唯一の存在。その身にさまざまな職務や因縁を背負う王太后や国王とは、警護の意味合いが違う。そういうことだ。

女性はまだ婚儀を上げていないため、王妃ではなく仮に「栄妃」と呼ばれている。国を栄えさせる存在という意味だろう。本来の名ももちろんあるのだろうが、何故なのか本人が言いたがらないと聞いた。
その栄妃の真新しい居間に、着任のあいさつに赴いた。黒髪黒目の栄妃は俺を見ると、新芽のような淡い緑のドレスの裾を気にしながら立ち上がった。着慣れないのだろう。
「御身をお守りさせていただく栄誉を賜りました、メイラー・セリ

クスと申します」
型通りの言葉を述べて膝をつき、騎士の礼を取って、王妃の手を額に戴く。ひんやりとした細い指。
――反応がないので、そのままの姿勢で戸惑っていると、横から女官長が声をかけた。
「栄妃様。栄妃様？　……固まっておいでだわ。栄妃様！」
それを聞いてうっかり顔を上げると、栄妃は頬を夜明けの雲のような薄紅色に染め、口をパクパクさせていた。
そして言った。
「王様や祭司長の上から目線より、ひざまずく騎士の下から目線って、破壊力デカっ！」

――瞬間、周りの景色が消えて、彼女だけしか見えなくなった。
異世界に召喚されて堂々としているのに、このような小さなことで恥じらっている。強く、そして繊細な、この女性。
騎士になって初めて、『心からの忠誠』という言葉の意味を知ったその日から、俺は仕事にも訓練にも精を出すようになった。

彼女はとにかく色々と規格外な言動の女性なのだが、昨日のことのように思い出せる印象的な出来事が一つある。
婚儀も間近に迫ったその日は、王城に宝石商がやってきていた。栄妃は国王とともに商人に会い、卓の黒い布の上に広げられた宝石類を眺めている。自ら、「自分の身を飾るものは自分で選びたい」とおっしゃったのだ。
普段あまり贅沢なことを好まれない妃なので、宝石を見たいとおっしゃった時は意外だった。今も、それほど目の前の輝きに熱中しているようには見えないのだが……。
「気に入ったものはあったか」
国王が隣の栄妃に声をかけ、商人が上品な微笑みを浮かべて、一

つの箱を差し出した。
「こちらはいかがでしょう。隣国から取り寄せた、大変珍しい一点ものの首飾りでございます。女性の頂点に立たれる方でいらっしゃる栄妃様に、ふさわしいかと存じます」
俺もちらりと目を走らせた。
あの馬鹿馬鹿しいほどでかいのが宝石か。ふん、芋か卵の間違いじゃないのか。

しかし彼女は、その首飾りに関しては何も言わず、ちょっと首をかしげてこう尋ねた。
「あなたはこの後、城の他の女性たち向けにも商いをするんでしょ？」
かっぷくのいい商人は、目を瞬かせた。
「はい。午後に、応接室の一室をお借りして、店を開かせていただくことになっております」
「侍女や女官や、街の女性たちは、どんな宝飾品をつけるの？　良かったら、見せてもらえないかしら」

なぜそのようなことを尋ねるのか、その場の人間はみな思ったことだろうが、商人は快く傍らの箱を引き寄せて卓の上に載せた。
開くと、細い銀の鎖に小さな宝石が三つ、等間隔で揺れている首飾りがいくつか入っていた。
「こちらはかなり以前から、街の女性に人気ですね。この国で多く産出される石ですので、本物でありながら値段もそう張りません」
「ふーん……なら私、これが欲しいな」
国王と商人が、同時に栄妃を見る。俺もつい、そちらへ目を走らせた。洒落た首飾りではあるが、とても彼女の胸元を飾るにふさわしいとは思えない。
栄妃は、星の瞬く夜空のような瞳で国王を見つめてから、ふと眼を伏せた。

「さっきの一点物も素敵だったけど、何だか寂しくて」
「寂しい？」
「私は異世界から来た人間……皆さんは優しく私を受け入れてくれたけど、黒髪黒目の女は一人だけ。そんな私が、一つしかない宝飾品をつけても、寂しさが増すだけのような気がして……。できれば、この国の大勢の女性たちと同じものを身につけて、少しでもこの国の一員になったような気持ちを味わえたらな、って」

俺はぐっと下唇を噛んだ。
なんと……なんと健気なお方なのだ！

商人も思わず目を潤ませている。
「栄妃様……そのようなお気持ちでいらしたとは」
「けれど恐れながら、やはりお召しものとの兼ね合いもございますし」
侍女が口を挟む。もっともな意見かもしれないが、少しは空気を読め。
国王がわずかに栄妃の方に身体の向きを変えながら、商人に言った。
「それで寂しさが和らぐのなら、余は妃の意見を尊重してやりたいと思うが……その方の意見はどうか」
「は」
商人は少し考え、
「それでは、お望みのこの首飾りを、いくつか重ねてつけた形に見えるものをお造りするのはいかがでしょうか。それなら、国の女性たちと同じものをつけられるのと同時に、お召しものと比較しても見劣りしないものをご用意できると存じます」
栄妃は嬉しそうに、国王と商人の顔を見比べた。
「そうしてもらえたら嬉しいな」
「なら、そうするがよい」

「ありがとう！」

この逸話はたちまち知れ渡り、男性からは同情を、女性からは親近感を呼んだ。さらに国王との仲睦まじさも表す結果となり、栄妃の人気はいやがおうにも高まったのだ。

そんな女性をお守りできることが、俺は誇らしくてならなかった。

しかしまさかこんなにも早く、俺がその役目を手放さなくてはならない日が来るとは……。

あれは、婚儀が行われて栄妃が名実ともに「王妃」となり、その御身にお子を宿して体調が安定した、そんな頃。

城下町の劇場での観劇にお供したとき、異世界から召喚された者を悪魔だと狂信的に信じ込んだ男が、給仕を装い貴賓席に侵入した。

俺は、王妃に刃物で襲いかかった男ともみ合いになった末、男とともに貴賓席から階下の客席へ転落。王妃の悲鳴が意識の彼方へ遠のく中、足のすさまじい痛みとともに気絶した。

その時以来、俺は左足を少し引きずって歩かなくてはならなくなった。膝の痛みは、その時に王妃を守ったという誇らしき勲章。

しかし、後遺症が残った足では、主を万全の状態でお守りすることはできない。俺は断腸の思いで、故郷へ帰って予備役につくことを受け入れた。

5　女王じゃなくて王妃だから

役目を退く報告で王妃の居間を訪れたとき、王妃は俺の手を取って泣いて下さった。その涙は、どんな宝石よりも、どんな星よりも、美しく俺の心に残った。

「いつか、あなたの故郷に遊びに、じゃなかった、視察か何かで行ってみたい。その時はきっと会いましょうね」

泣き笑いの顔の王妃に、俺は涙をこらえて頭を垂れた。

「この足がきっかけで王妃様をお招きできるなら、故郷の者は皆、私の負傷を名誉に思うことでしょう。その時は、この足でもお役に立てるところをお見せしとうございます」

「ええ。あなたは私の一番の騎士だもの、きっとまた私を助けてくれるわね」

顔を上げたとき、俺は確かに後光を見た。

王妃は、俺の女神。

その時の言葉を励みに、故郷の警備隊の顧問のような仕事をして日々を送った。足は朝晩や疲れた時に痛むくらいで、杖も必要ない程度の症状だったから、この程度の仕事など軽くこなせると思っていた。

しかし、かつての仕事との大小の差が目につき、喪失感が心の奥にだんだん重く居座るようになり。

いつしか、酒の量が増えていた。不良騎士に逆戻りか……。

◇　◇　◇

閉店時間になって仕方なく店を出ると、ゆっくり歩いて自宅に向かう。石畳の道はすでに暗闇に沈み、人通りもほとんどない。

この街は俺の故郷だが、俺は実家には戻らず、職場に近い平屋の

一戸建てに住んでいた。扉の鍵を回して開けたところで、後ろから鈴の鳴るような声で話しかけられた。

「メイラー？」

振り向くと、若い女が立っていた。頭にかぶった手巾の下から、白い髪のお下げが胸元に垂れている。瞳は暗くてよく見えないが、かなり濃い色。

そしてその顔は、俺の心の女神にそっくりだった。

「シーゼさま……」

俺はややろれつの回らない声でつぶやくと、そっと女の手を取った。女はされるがままで、にこりと微笑んで言った。

「中に入れてくれる？」

その時の俺は、感情を取り違えていたとしか言いようがない。

敬愛する王妃。彼女のそばにいたいという、狂おしいほどの気持ち。そんな彼女にそっくりの女が、家に入れてくれと言う。

俺は女の手を引くと、抱き寄せながら家の中に引っ張り込んだ。

「うわ、あれ？　ま、待ちなさいよコラ」

唇を奪おうとすると、女は顔を振って避け、ついでにぺしっと俺の額を叩いた。

「私はこういう展開もアリだけど、そっち的にまずいんじゃないのコレ。私はあなたの主人でしょうが」

「いいね、そういう女王様系の設定……あんた俺の好みだな」

ささやきながら、壁に押しつける。首筋を吸いながら、手を性急に動かして服の隙間から素肌を探す。

「ちょ……ま、まあ、女王様プレイ好きなら私なんかおあつらえ向きかもね……って、女王と王妃って何か違わない？」

「細かいことはいいだろ？」

もつれるように敷物の上に倒れ込む。
その拍子に、白いものが跳ねとんだ。

敷物の上に落ちたのは、女が頭にかぶっていた手巾と、それにくっついた白い三つ編み……つけ毛？
そして布の下から現れたのは、つややかな黒髪だった。

俺は彼女の上から反射的にとびすさると、壁際まで下がって平伏した。
「申っし訳ございませんっ！！！　いかようにも御処分を！」
王妃は肘をついて上半身を起こし――なぜ王妃がここに！？――俺を見て肩をすくめた。
「もう終わり？　ちぇー、ちょっとときめいちゃったのに」
「その気！？」
「なんかいい雰囲気だったから、こうなったらイタシカタないっていうか、イタすしかないっていうか」
「なりません王妃様！」
「声が大きいよっ。シーゼって呼んでいいから！」
「そ、そんな、恐れ多い……！」
「気に入ってる名前だから、そっちで呼んでよ。フェザーにこの名前もらった時は、シーツとガーゼ足したみたいな変な名前だなぁと思ったけど、今は愛着わいてるのよね」

へ、陛下……ご存知でしたかこの感想。
イルフレートが伝えてきた意味を受け、俺の脳裏で白い布がヒラヒラとはためいた。

◇　◇　◇

「と言うわけで、私は城から逃亡せざるを得なかったってわけ」

簡素な机でパンとチーズを喜んで召し上がっているシーゼ様に、俺は質問させていただく。
「王ひ……シーゼ様、ここまでどうやっておいでになったのです」
王城からここまでは、移動し続けて一日半はかかる。
「小舟と、貸し馬。あ、地図はだいたい頭に入ってる」
「代金は？」
「少しは持ってたし、足りなくなったらこれがあるし」
シーゼ様は肩かけ鞄を引き寄せると、中から首飾りを取り出した。あの、俺が彼女を守りたいと強烈に思うきっかけとなった首飾りだ。しかし、石が一つ二つなくなっている。
シーゼ様は口の中のものを飲み込んで、機嫌良く言った。
「一点物より、庶民的なものの方が換金しやすいと思ったんだけど、正解だったわ。足つかないしね」

俺の中で何かが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちて行った。

「……し、しかし、まさかグレッド様がそんな」
「私はあったことをそのまま言っただけよ」
重くため息をつくシーゼ様に、俺はあわてて言う。
「いえ、疑ったわけでは。驚いただけです。とにかくそういうことでしたら、むさ苦しいところですがひとまずこの家にご滞在下さい。数日中に、もっとくつろげる場所をご用意いたしますので。後のことはおいおい」
すると、シーゼ様は弱弱しく微笑んだ。
「ありがとう……良かった、メイラーが城の外にいてくれて」
ついさっき崩れたものが急速に修復され、俺は舞い上がった。
シーゼ様が、俺を頼りにして下さっている！
表情筋がニヤニヤ笑いの形に反応するのを必死に押さえ込んでピクピクさせながら、俺はシーゼ様の椅子のそばで左膝をついて（ちょっと痛い）頭を垂れた。

「もったいなきお言葉。しかし、この足でお役に立てますかどうか」
「必要なのは兵力じゃないから……」
その言葉に、思わず目頭が熱くなる。こんな俺でも、シーゼ様のお役に立てることがあるらしい。
俺はパッと顔を上げてそのお手を取ろうとして……動きを止めた。
シーゼ様は、机に突っ伏しておやすみになっていた。
あ、弱弱しく見えたのは眠かったからか……って、え？　俺の目の前で？　安心？　無防備？　って主を机で眠らせるとかどうなんだ？　俺の寝台へ？　ややや役得っ……！？
俺は細心の注意を払ってシーゼ様を抱き上げた。ひ、膝に来る……が、俺の胸元に顔が寄せられて長いまつげが……柔らかくて良い香りが……。
そっと寝台に降ろすと毛布をかけ、俺は家の外に飛び出すと、街の共用井戸で冷たい水を汲んで頭にぶっかけたのだった。

5　女王じゃなくて王妃だから（後書き）

明日は王城から中継で、国王陛下に結婚前後の思い出を語って頂く予定です。それでは今夜はこの辺で。

6　長き黒髪の花嫁（前書き）

お気に入り登録１１１１件突破ありがとうございます！

6　長き黒髪の花嫁

シーゼが『帰った』と聞かされた、その日の夜。
余はたった一人、寝台に起き上がって足を降ろしたまま窓から外を眺めていた。眠れなかったのだ。
この寝台は、こんなに広かっただろうか。結婚して以来、ここにシーゼがいなかった夜などほとんどないからな……。

◇　◇　◇

思えば、シーゼは最初からそういうことに積極的だった。王妃になるのを承諾したと思ったら、もうその日に
「じゃ、今夜フェザーの部屋に行くわ」
と言い出して、侍女たちの度肝を抜いた。
寝室を共にするのは結婚式を挙げてからでよい、と言うと、
「えー、だって世継ぎを生むために呼ばれたんだから、式なんか待ってないでさっさと仕込みを開始してもいいじゃない」
と言い放って、侍女たちの魂も抜いた。
こちらの世界の貞操観念も考えてくれ、と言ったら
「こりゃ失礼」
とようやく引き下がってくれたが――何を焦っているのか。

そしてそれがきっかけだったのか、彼女はこちらの世界のことを学んでこちらの人間らしく、そして王妃らしく振る舞うことを心がけ始めた。
と言っても、彼女がやらなくてはならないことはそう多くない。こういっては何だが、異世界からの王妃は世継ぎ以外の役割は大して期待されていないのが実情だ。彼女もそれは、王妃教育の中で徐々に感じ取っていったらしい。

「えーと、フェザーには悪いんだけど、このお城で一番偉いのって、王太后様なの？」
午後のお茶の時間に二人きりになった時、聞きにくい（はずの）ことをスパッと聞いて来た。
まあ、事実なので隠すこともない。余は説明した。
「王太后のレレイザ様は、先代の父王とともにこの国の発展に偉大な貢献をなさった人物だ。夫婦と言うより、戦友だった。余よりも明らかに格が上だ」
「ふーん。……フェザーは何だか、王様業がつまらなさそうね。嫌なの？」
「嫌ではないが、他に適した人間が身近にいるわけだからな。余でなくてもいいのだ、という思いはある。国王失格かな」
苦笑すると、彼女はまたもやスパッと言った。
「失格なんて思うことないよ、王家に生まれたのはフェザーが選んだわけじゃないんだから。あなたは何も悪くないでしょ」
「いや……この国では、子どもは親を選んで生まれてくると言われておるのだ」
そう言うと、彼女は少し顔をしかめた。
「そうなの？」
「そうだ。だから、この場所に生まれた意味を見つけなくては、と両親からよく言われたものだ」
余は、故人である父王と実の母である第二側妃を想い浮かべた。厳しかったが、優しい両親だった。

彼女は少し沈黙してから、こう言った。
「ふうん……。いいわね、親にそうやって励ましてもらえたら。私の生まれにも意味があるのかな？　あんな両親の間に生まれた意味が？」
「……」
余はこの時にはもう、彼女が著名な両親の元に生まれた隠し子で

あることだけは聞いていたが、詳しいことは聞きかねていた。どれだけ不自由な暮らしを強いられていたのか。
しかし彼女は、旺盛な食欲で茶菓子をつまみながら、さらっと言った。
「まあ少なくとも私は、あなたがこの国の王様で良かったわよ」
初めて出会ったころよりも、ずいぶん表情が柔らかくなった彼女を見て、余は思った。
彼女が余との結婚を喜んで今ここで微笑んでいる、そのことが両親がきっかけだと言うなら、彼らに感謝してもいいのかもしれない、と。

召喚から二ヶ月後、結婚式と王妃のお披露目は滞りなく行われた。
王城の謁見の間で、余の手から妃の頭に華奢な王妃冠を載せる。顔を上げた妃の手を引いて壇上に促すと、妃はすらりと余の隣に立って祝福する人々の方を向いてみせた。
もともと整った顔をしているとは思っていたが、化粧をした妃は歴代の王妃に引けを取らぬほど美しかった。初めはドレスの着こなしにも苦労していたようなのに、今ではすっかり堂に入ったものだ。身についた、というよりも、それらしく見せる演技が上手いのだ。
白地に金糸の刺繍の入ったドレスは腰の切り替えがなく、彼女の身体に沿っていて、女性らしい腰の線を際立たせながら足元に向けて広がっている。
そして黒髪はわざと目立つように、耳のあたりに少し生花とイルフレートをつけているだけで、後は背中に流れ落ちるままにしてあった。異世界人の象徴である色を目立たせるための、祭司長の指示だ。その髪も、侍女たちの苦労の賜物か、美しく艶やかに光っている。
髪を見つめていたのに気づいたのか、彼女は拍手を送って来る人

々の方を向いて微笑んだまま、余だけに聞こえるように言った。
「髪を伸ばしてたのが、こんなところで重要になるとは思ってなかったわ、さすがに」
「何か意味があって、伸ばしていたのか？」
余も人々の方を向いたまま尋ねると、彼女は答えた。
「うん。いざ逃げるって時にバッサリ切れば、印象が変わって見つかりにくいと思って」
また逃亡の話か、と余が苦笑したのに気づいて、彼女は言った。
「ああごめん、ただ、いつでも逃げられる状態にしておかないと落ち着かないからそうしてただけ。身に沁みついちゃってね。もう逃げたりしないよ」
「そう願いたいものだな」

まさか新郎新婦がこんな会話を交わしているなどとは、誰も思わないであろう。
余は内心ため息をつきながら、彼女と腕を組んで大広間へと移動した。

7　後朝の贈り物　（前書き）

お気に入り登録１２３４件突破、総合評価３３３３ポイント突破ありがとうございます！（作品にちなんで数字にこだわってみた（笑））

7　後朝の贈り物

祝宴が始まると、招待客が次々と我々夫婦の元にあいさつに訪れた。しかし、若い女たちは明らかに妃を値踏みしており、余に自分を印象付けておこうという言動が鼻につく。もし余と妃が不仲になったら側妃に……ということだろうか。

妃はわかっているのかいないのか、終始微笑みを絶やさなかった。たくましい女だ。

その夜、夫婦の寝室となった部屋で、王妃となった彼女は寝台に腰かけて余を待っていた。

彼女はごく普通の夜着姿で、少々警戒していた余は内心胸をなでおろす。こちらは未だに、妃との距離感を測りかねていたからだ。しかし彼女は上目遣いで一言、

「『疲れただろうから今日は休め』とか言わないよね……？」

と先手を打ってきた。

む……強引に迫って来られるよりも、この迫り方は逆に惹きつけられるような……。

「そうは言わないが……全身全霊で取り組まなくとも、子どもはできる時はできる、そういうものではないのか？　何をそんなに急いでおるのだ」

彼女の隣に腰かけながら、気になっていたことを聞いてみると、妃は言った。

「だって、心配なの。本当に子どもができるかどうか」

ああ、そうか……と余は彼女の気持ちを想像した。

子どもができなければ自分の居場所がなくなる、そう思っているのだろうか？

しかし彼女は、心配そうにこう続けた。
「海外旅行に行くと、日本の電化製品が電圧の違いで使えなかったりするんだって。異世界人同士の私とあなただって、そういうアレで妊娠しにくいとかあるかもしれないでしょ、変圧器があるわけじゃないんだしさ。うわ、プラグ突っ込んだとたんに故障して使いものにならなくなったらどうしよう」

ぷらぐ、つっこむ？
イルフレートが伝えたあいまいな意味を、余はかろうじて咀嚼し飲み込んだ。ある意味、本当に妃を理解しようと思ったら、イルフレートでは追いつかぬ。
「……そなたの考え方が独特なのはよくわかった。しかし、過去に召喚された王妃はみな、無事に子を授かっておる」
「ならいいけど」
さらりと答えた彼女は、少し沈黙した後で言った。
「ねえ……例えば王妃が、この城から逃げ出さなきゃならないようなことって、あるのかな？」

余は一瞬、言葉を失った。
逃げる可能性を考えることが身にしみついていると言っていたが、彼女は結婚式を挙げた今も、余や周りの人間、それに現在の生活自体を信じていないのだ。召喚されたばかりの頃の、人間より城を先に信じた彼女を思い出す。
お互い必要性があっての結婚だが、余と彼女は心の中に、人間を信じられないという似た部分を持っているのだ。
そんな男女が身を寄せ合う――意外と、似合いの夫婦なのかもしれぬ。
「……そのような不吉なことを申すな」

余は苦笑しながら、彼女の髪を軽く撫でた。早く彼女には安心してほしい、と思った。
「不吉？」
「王妃が逃げるのは、他国から攻められてこの城が陥ちる時くらいであろう？」
妃は肩をすくめた。
「それもそうか」

わずかな沈黙。
余の瞳をじっと見つめていた妃が、唇を寄せて来た。軽く触れ合う。
妃はいったん顔を離して、微笑んだ。
「こっちって、結婚式に誓いのキスはしないのね。何だか、やっと！　って感じ……」
それからもう一度、今度は深く。さらにもう一度。腕を回すと、女性らしい曲線を持った身体がだんだん熱を帯びて、余の体温とまじりあって行くのがわかる。

「そなたの名前は、結局教えてはくれぬのか」
耳元でささやくと、
「隠すつもりはないんだけどね。本当は、シズコって言うの」
彼女も耳元でささやき返してきた。
「でも私、向こうでも本当の名前は名乗らないで、自分で勝手につけた名前を使ってたんだ。時々変えたりもしてたし。今はもうあなたが私の夫なんだし、こっちでの名前はあなたがつけてくれない？」

妃に、余が名前を……。

二人の距離が、一気に縮まった気がした。直接肌と肌を触れ合わせながら寝台に横たわると、先ほど妃の言った「やっと」という感

覚が、余の中にもようやく湧きあがってきた。
「……そなたをもう少し知ってから、名前を考えることにしよう」
言うと、妃は濡れた瞳でこちらを見上げてくすくすと笑った。
「じゃあ、私をじっくり教えてあげなくちゃね」

翌朝、余は妃に「シーゼ」という名前を贈った。「シズコ」という発音から思いついたのだ。
「『シーゼ』……？」
妃はかなりいぶかしげな表情をしている。ああ、きっと、イルフレートが翻訳できなかったのだろう。
「古い言葉で『家』とか『居場所』という意味だ。そなたはここで居場所を得たのだから、と思ってな」
説明してやると、彼女は驚いた顔になった。
「……今まで、いい人にも何人か出会えて、私が見つかりそうになると『早く逃げろ』って助けてくれたの。でも、『ここがお前の居場所だ』って言ってもらったのは、初めてだわ」
そして、余の首に手を回して抱きついて来た。
「ありがと、嬉しい……んっ」
「ん。い、いや、さすがにそろそろ寝室を出なくては」
「だーもーっ、ここは盛り上がるところでしょうが！？」

◇　◇　◇

そうだ。居場所を得て、喜んでいたではないか。それなのに、『帰った』……？
余は腕を組んで考え込んだ。そして、小さな疑問点に行き当たった。

彼女が帰るために必要だった、帰還の陣。それを、祭司長はどのようにして開いたのだろうか。

魔方陣を開くには、相当量の魔力が必要なはずだが、現在それを用意することは可能だったのか……？

7　後朝の贈り物　（後書き）

次話はこの世界の魔法について。王妃視点なのでざっくりいい加減にいつもの調子で語られると思います。

8　この世界の魔法

私は、夢を見ていた。
お城で生活をし始めてしばらく経って、フェザーと結婚して、ようやく私にもこれは現実なんだということがじわじわと実感できてきた、そんな頃の夢だ。

◇　◇　◇

ある日、私はフェザーとの夕食の真っ最中に、いきなりフォークを取り落として叫んでしまった。
「魔法！？」

「ぐほっ……どうした、急に」
むせるフェザーに、私は椅子から腰を浮かして言った。
「いや、今さらで悪いんだけど、異世界から人間を召喚できるってことは魔法があるってこと！？　この世界には！」
普段の生活には魔法の気配が全然ないもんだから、すっかり忘れてたよ！

「本当に今さらだな……一応、魔法はある」
フェザーは口元を拭きながらうなずいた。そのテンションの低さにこっちも少し興奮をおさめながら、聞き返す。
「なに、『一応』って」
「建国時は魔法大国の名をほしいままにしていたが、長の年月の間に血が薄れたのか、ほかの要因があるのか、とにかく現在では魔法は弱体化しているのだ」
「でも、召喚なんてすごいことができてるじゃないの。それにイルフレートだって」

いろいろ問いつめてみたところ、今ではこの世界の魔法っていうのは、例えて言うなら「スプーンなんて手で曲げられるじゃん」みたいなレベルなんだそうだ。ちょっとがっかり。

そして召喚魔法は、例えて言うなら「虫眼鏡で日光集めてまで目玉焼き作らなくても」みたいな、時間も手間もかかるかなり無理矢理感のあるシロモノなんだそうだ。

「九十九代目の国王妃を召喚した翌年に、もう百代目の国王妃を召喚しなくてはならなかった時など、過労で倒れる魔法官が続出したと聞く……」

痛ましげにつぶやくフェザーに、

「だからキリ番とかゾロ目にこだわるのやめようよ」

つっこむ私。まあ、じゃなきゃ、百二十三代っていう“連番国王妃”の私は召喚してもらえなかったわけだけど。

「とにかく、魔法官っていう職業の人がいるのね？」

「ああ。魔法の研究と保存、それに召喚などの技のため、魔力の蓄積などを行っている者たちだ」

「面白そう、会ってみたい！」

というわけでその翌日、私は魔法庁と呼ばれる場所に遊びに、じゃなかった、視察に行った。

研究所みたいな場所なのかと思ってたら、意外にもそこはガラス張りの温室だった。私が召喚された時に出現した聖堂、あれもガラス張りだったな、と思っていたら、大理石でできた大聖堂を挟んで東側に召喚された時の聖堂（小聖堂）、西側に魔法庁、というつくりになっていて、それらの建物は続きになっていたのだ。ていうか、私ガラスガラス言ってるけど、本当は水晶みたいな貴重な石らしい。さーせん。

魔法庁の水晶の建物は、中央に天井を突き抜けて大きな木がそびえ立っていて、その木の根元に置かれた一枚板の大きなテーブルで、何人かの魔法官が仕事をしていた。書類仕事をしてる人もいれば、理科の実験みたいにフラスコみたいなものをあれこれしている人もいる。私はそこを、魔法庁の長官に案内してもらった。

長官は、少しクリーム色がかった長い白髪をアップにした、四十代前半くらいの女性。政治家みたいにきりりとした雰囲気で、私は一瞬テレビで見た自分の父親を連想して、ちょっぴり苦手意識を持ってしまった。いかんいかん。

「魔法の力は自然界から少しずつ生まれていて、それを世界中からこの場所に集めています。この建物は、力を吸収しやすいように考えられて作られているのです」

長官は、魔法のない世界からきた私にもわかるようにかみ砕いて説明してくれた。そして、

「ここが、魔力を蓄えておく場所です」

と見せてくれたのが、建物中央にそびえる木の洞(うろ)だった。洞の中には、ぱっと見で砂時計の形をしたガラス（あ、水晶か）の大きな入れ物がはまりこんでいて、その中で何かがキラキラ漂いながら光っている。

「ここに溜まった力を使って、召喚は行われたのですよ」

「へぇ……何だか綺麗。イルフレートも、この力を使って作られたんですか？」

私の髪に、髪飾りの一部のようにしてとまっているイルフレートを指さして聞くと、長官は赤紫色の瞳を細めながら答えてくれた。

「あれは少し違います。遺跡などから、古代の強い魔法が保存された状態で発見されることがあるのです。それと現在の技術を結びつけて、イルフレートなどの魔精霊を作り出しています」

「へええー。じゃあ、イルフレートってずいぶん希少な存在なんで

すね」
私は感心してお礼を言った。
「私のために使わせてくれて、ありがとうございます」
すると長官は、艶のあるほほえみを浮かべて言った。
「そんな、恐れ多い。王妃様を召喚する際は、予定していたより少ない魔力で召喚することができましたので、私どもこそお礼申し上げます」
「そうなんですか？」
「こちらから引く力に、抵抗感があまりなかったと……むしろこちらに来ようとする力を感じたと、祭司長が」
ハハハハハ。笑っとけ。

◇　◇　◇

私はいきなり覚醒すると、寝台の上に起き上がった。
一瞬自分がどこにいるのかわからなかったけど、朝陽の差し込む殺風景な木造の部屋を見てすぐに思い出した。そう、退役した近衛騎士のメイラーの家にいるんだった。

もう一度、長官に説明してもらったことを思い出しながら考える。
私を召喚するために、まあ少なく済んだとはいえかなりの量の魔力を使ったわけよね。それなのに、残りの魔力で帰還の陣も開くことができたの？　帰りたがっていない私を無理矢理帰すには、それくらいじゃ無理なんじゃ？　やっぱりあれは、帰還の陣じゃなかったんじゃなかろうか。
いやいや、でも召喚から二年経ってるんだから、それなりの魔力は溜まっている……？
ダメだ、私は専門家じゃないからわからない。
「お目覚めですか、シーゼ様。ゆっくりお休みになれましたか」

気がついたら、メイラーが寝台のそばで膝をついていた。壁際の床に毛布が一枚置いてある……あそこで寝てくれたのかな。でも今はすでに動ける準備万端という感じで、さすがは元騎士だと思う。
「おはよう、メイラー」
私は寝台から足を降ろして、彼に向かい合ってから尋ねた。
「ねえ、あなたはまだ私の騎士？」
「もちろんです。この忠誠、揺らいだことなどございません」
「良かった。それじゃ、会いに行きたい人ができたから、付き合って欲しいんだけど」
「は？」

魔法にある程度詳しい人で、今会いに行ける人といったら、一人しか思いつかない。
私は枕元に置いてあった、白いつけ毛を手にとって言った。
「これをくれた人。この髪の、元の持ち主に会いに行きたいの」
メイラーは言った。
「人毛！？」

あ、なんか今ちょっと引かれたかも。

9　魔法官の見習い

ハーヴェステス王国に召喚されてから、乗馬の練習はかなりまじめにやったので、妊娠するまでの数ヶ月でかなり乗りこなせるようになった。だってやっぱりこちらの主な移動手段だからね、何かあった時に必要になるでしょ……って本当にそうなっちゃって残念だけど。

私はメイラーと轡（くつわ）を並べて、馬を駈け足で走らせていた。このスピードならどうにか話ができる。街から街へと向かう道はレンガが敷かれて整備されていて、馬車がすれ違える程度の広さもあり走りやすかった。

「このつけ毛は、アユルの髪で作ったの。アユルって覚えてる？」

つけ毛つきの手巾をかぶった私が聞くと、メイラーはやや長めの髪をなびかせながら――彼の髪はほんのりオレンジ色がかった白だ――返事をした。

「覚えてます、有名でしたから。魔法庁で働いていた、魔法官見習いの少年ですよね」

「あ、やっぱり有名だったんだ、あの子」

私がメイラーに視線をやると、彼は何とも言えない表情をした。

「俺が言うのも何ですが、綺麗な少年でしたからね。侍女たちの噂の的でした」

「私も初めて会った時は、女の子と間違えたんだ」

私はその時のことを思い出した。

◇　◇　◇

私が魔法に興味を示したので、魔法庁の長官が何日かに一度、王妃教育の一環でちょっとした講義をしてくれることになった。でも

さすがに長官さんだけあって基本的に忙しい人で、突発的な仕事で遅れることもあるし、来られないこともある。
それで長官が気を遣ってくれて、
「私より話しやすいこともありますでしょうし」
と、そういう時の話し相手に助手をよこしてくれることになった。魔法官見習いとして修業中の子なんだって。

十二、三歳くらいのその助手の子に初めて会ったとき、私はびっくりして声をかけるのも忘れてしまった。だって、まるで宗教画に出てくる天使みたいに綺麗な子なんだもん！
こちらの人はみんな白っぽい色の髪をしているけど、その子はほのかに青みがかった白。綺麗にウェーブして、お尻の下あたりまで艶やかに流れ落ちている。瞳はアメジストみたいな透き通った紫で、ぱっちり二重に天然のアイシャドウ。透けそうに白い肌はうっすらとピンクに染まり、ふっくらした唇は珊瑚色。
魔法庁の制服のシンプルな白のローブも似合ってるけど、ぜひともドレスアップしてほしい。あっ、め、メイド服なんかもイ、イイかも、って息荒くして怪しいわ私。

「あ、ごめん、つい見とれちゃって。よろしくお願いしますね」
あわててあいさつすると、その子は本当に天使のように神秘的な微笑みを浮かべ、膝を軽く曲げた。
「アユルと申します。ハーヴの民に繁栄をもたらすお方のお役に立てるなんて、とても光栄です。何でもお申しつけください」
あれ、高いけど意外にもハスキーな声。地声なのかな？
「もしかして、風邪引いてる？　無理しないでね」
そう言ってみると、アユルは困ったように微笑んだ。
「お耳汚しで申し訳ありません、声変わりの途中で」
え？　おやまぁ。
「えっと、きっと言われ過ぎてうんざりかもしれないけど、アユル

って男の子なの？」
「はい」
アユルはやはり慣れているのか、軽くうなずいた。

私はすぐにアユルと仲良くなった。彼も長官のお許しを得て、ちょくちょく顔を出してくれるようになった。
アユルとは、長官の講義の時よりもずっとくだけた雰囲気で話ができる。テラスでお茶しながらのこともあるし、庭を歩きながらのこともあった。
「アユルもそうだけど、魔法庁に勤務してる人たちって、みんな見事な長い髪をしてるよね」
聞いてみると、
「長い髪は、魔力を受け止めやすいんです。そうして受け止めた魔力を、魔法官が体内でゆっくりと練って、魔法庁の聖樹の器に蓄えていくんです」
と説明してくれた。
聖樹の器って、あの木の洞にはまってた砂時計みたいなやつか。
「それって、誰でもできることじゃないんでしょ」
「あ……素質のあるなしはあるみたいです」
控えめに応えるアユルに、私は感心して言った。
「アユルは有望株ってことね。素質がないと、髪を伸ばしても何も変わらないの？」
「本人が意識できないだけで、力は宿っていると考えられていますね。だから、何か願い事のある人はよく髪を長く伸ばしていますよ、一般の人でも」
「ふーん。それにしても、本当に綺麗な髪」
アユルの髪を褒めると、彼は素直な笑顔を浮かべて言った。
「王妃様の髪の方が、ずっと綺麗です」
彼はどうやら本気でそう思ってくれているようで、少し頬を紅潮させて私の黒髪をじっと見つめている。

そしてストレートに言った。
「あの、触ってもいいですか」
……うーん、それはたぶん、まずいんじゃない？　かつての私なら全然構わないけど、一応今の私は王妃様で、それなりの対応を求められる立場なんだよね。あ、ほら、侍女がたしなめるような目でこっちを見てる。
「えっと、アユル」
私が言いかけると、彼は自分で気づいたらしかった。ハッとして一歩下がり、頭を下げた。
「も、申し訳ありませんっ。僕、すぐ思ってることをしゃべっちゃって……いつも長官にも注意されているのに」
はは、じゃあいつもこんなこと言っちゃうんだ。そのうち天然の女たらしになったりして。
「ううん、いいのいいの。あ、そうそう、他にも聞きたいことがあってね」
私はすぐに話題を変えたのだけど……。

１０　星降る夜の密談（前書き）

裏切ってすみません（m__m）

10　星降る夜の密談

結婚して三ヶ月ほど経った、ある夜のこと。
フェザーが仕事が忙しくてちっとも寝室に姿を見せないので、私は一人で散歩に出かけることにした。寝室にディスプレイされた壺をずらして、その下から続く王族用の逃走経路を通れば、侍女やメイラーたちに気づかれずに聖堂の裏庭に行けるのだ。
裏庭に出ると、空には一面の星屑。けぶるような天の川は少し紫がかって、そのきらめきのほんの一部を地上に降らせている。花弁を閉じて眠る白い花や大理石でできた白い東屋が、幻想的にうっすら紫に染まっていた。
そうだ、私も居間の外の庭で何か育ててみたいな、日本ではそんなことできなかったけど今ならできるし。
脳内でガーデニング計画を練りながら、東屋まで歩く。フェザーの居間から果実酒をちょろまかしてきたので、あそこで星見酒としゃれこもう。

「……おっと」
「あっ」
なんと、東屋には先客がいた。
大理石のベンチの上で抱えていた膝を、あわてて降ろして立ち上がったのは、アユルだった。白の上下のパジャマ（？）姿の彼は、白い髪を星明かりに浮かびあがらせて、憂いを帯びた瞳で私を見ている。まるで一枚の絵のようだ。
「アユルじゃないの……どうしたの、こんな夜中に」
「王妃様こそ」
ですよねー。
「ま、まあここ座って。アユルも飲む？　って未成年か」
掲げた果実酒のボトルをあわてて降ろす。こちらはあまり飲酒に

は厳しくないようだけど、一応成年は十六歳だ。
アユルはくすりと笑って、先に座った私の隣に腰を下ろした。そして、ぽつりと言った。
「ちょっと、家にいづらくって」

孤児院出身の彼は、魔法庁の長官夫妻の住む公邸に居候している。捨て子だったので、両親の顔を知らないそうだ。私は「両親の顔を知っている捨て子」だけど、そんな共通点があることもあって、いつも彼のことは気にかけていた。

「何かあったの？　良かったら話してみて」
私はアユルの端正な横顔に話しかける。お姉さんに何でも言ってごらん？
「……いいんですか？」
許可を求めてくるところも可愛いな！　少年の上目遣いって凶器だな！
「もちろん」
力強くうなずいて見せると、アユルはちょっと顔を上げて、ふう、と息をついた。
「長官の御主人が、長期出張先から戻られたんです、今日」
「ふんふん」
長官の旦那さんは、国境警備を任されている騎士団の団長さん。単身赴任先から戻って来たのね。
「お留守の間に色々あったから、なんだか気まずくて」
色々って、何が？
「僕、年上の女の人って好きだし」
ちょ？
「長官も寂しかったんだと思うんですけど」
あれ？
「やっぱり不倫は良くないですよね」

ま？

何だか天使に似つかわしくない単語が出てきた気がするんだけどつまりこの子ったら長官と！？

「そりゃ気まずいわ！」

仰天のあまり私は思わずつっこんだ。こっちの髪が白くなりそうだっつの――！

気つけを一杯やってから、改めてアユルの話を聞く。

つまりあれよ、私の心配した通りになっちゃってたんだ。私に「髪に触ってもいいですか」って言ってきた、あの調子で長官に懐いちゃって、ついそんな雰囲気に……っていうね。

「どっ、どうしたいのアユルは……これからも魔法官見習いの修業は続くんでしょ？」

「そうなんですけど、それも考え直そうかなって」

アユルは悪びれたところなく言う。この子一体、どっちの方向に天然なの！？

「僕、どうやら魔力要員としか思われてないみたいなんですよね」

「魔力要員？」

「イルフレートとかの魔法を使った技術を扱う仕事は、貴族出身の人たちの仕事。孤児の僕は、魔力を受け止めて器に注ぐだけ。長官とごちゃごちゃしたまま、魔力を注ぐだけの仕事をずーっとやっていくのかと思うと、ちょっとな、って」

この子、意外と上昇志向の持ち主なのかも。

私はアユルの、相変わらず曇りのない瞳を見つめた。

それほど厳しくないとはいえ、一応『身分』というものが存在するこの国で、自分の望んだ職業につける人は一握り。でもこの子は、自分はこの仕事をずっとやっていくだけでいいのか、って考えてるんだ。

アユルは笑って付け加えた。
「それに、どこかに僕の外見だけじゃなくて中身を見てくれる女の人がいるかもしれないですし！」
ぷっ、と噴き出してしまった私を見て、アユルが不思議そうに小首をかしげる。
「あはは、ごめんね笑ったりして。泥沼不倫してる割に、恋に前向きでいいなと思ったの。うん、そういう風に色々考えてるなら、私は応援する」

するとアユルは、逆に心配そうに言った。
「ありがとうございます……でも、王妃様はいかがなんですか？今ここにいらっしゃるって、まさか王様と何か」
「ああ、ただベッドで待ってるだけっていうのも退屈だから、散歩に来ただけ。だって最近ほったらかしなんだもん、私のこと」
私は憤然と言った。アルコールの勢いもあったし、アユルはもう男女のアレコレを知ってるんだと思ったらつい口が滑ってしまったのよ……だって深夜テンションでこんな話できる人、他にいないんだもん。
「ありえないでしょ、三日もしてないんだよ新婚なのに。子作りする気あんのかしら」
「……み、三日くらいは許して差し上げて下さい」
あ、そう？
「まあ、フェザーも色々と考えてくれてるんだと思う。きっと、あまりガツガツしたら私が可哀想とか思ってるんじゃないかな」
「可哀想？」
「うん。世継ぎを生ませるために私を召喚した割には、フェザーは私のこと、子を生むだけの存在にしないように気を遣ってくれてるみたい」

アユルは私をじっと見つめて、そしてまた天使の微笑みを浮かべ

た。白くも黒くもない、透明で素直な微笑み。
「素敵ですね。僕もそういう結婚相手を見つけたいです」

「ええっ、そう！？　なんか私とフェザーってすれ違ってる気がしない？」
「でも、今ごろ探してらっしゃるかも」
「これ幸いと一人でのんびり寝てるかもよ」
「もしそうだったらどうするんですか？」
「日本にはねアユル、『据え膳』っていう言葉があるの。当然いただくわ」
夜空にひそやかな二つの笑い声が広がった。

その数日後、私の部屋にやって来たアユルを見て、私は仰天した。
「アユル……髪が！」
彼は、お尻まであったあの見事なウェーブヘアを、あごの線でバッサリ切り落としていた。
彼はもう魔法庁の制服のローブすら着ていなくて、白のシャツに臙脂色のズボンという少年らしい格好で片膝をついた。
「ごあいさつに伺いました、王妃様。僕、魔法庁を辞して修道院で働くことになりました」

◇　◇　◇

メイラーと並んで馬を走らせながら顔を上げると、前方に緑の山が見えてきた。あの山の中腹に、アユルが働いているはずの修道院がある。
まさか王妃が城から逃げ出して自分に会いに来るなんて、アユルはかけらも思ってないだろうなぁ……と思いながら、私は手綱を握り直して馬を急がせた。白いつけ毛が背中で跳ねた。

１０　星降る夜の密談（後書き）

次話、アユル視点です。

11　堕天使の受胎告知

黄昏の女神シャンピの残照が消え、星と夜の神ニュイスが支配する時間が訪れると、僕はいつもあの方を思い出す。夜の庭園に、夜色の髪を背中に流して立っていても、闇に溶け込まずに存在感を放っていたあの方――雄々しいと言ってもいいくらい凛とした王妃様。

もしかして王妃様が夜の神の化身だったから、女みたいな僕は黄昏の女神みたいに、夜の端っこにくっついてその力を分けてもらえたのかも。だから今、強くいられるのかもしれないな。

僕は窓から離れて、あたりを見まわした。部屋のあちこちには花がふんだんに活けられた花瓶が置かれ、凝った意匠の長椅子や机が上品な雰囲気を醸し出す。

ここが今の、僕の仕事場。僕の唯一の武器で戦うことができて、同時に身を守ることができる場所。

◇　◇　◇

魔法庁に勤めていた頃、そこを辞めることを決めた僕は、王妃様にあいさつに行った。王妃様は短くなった僕の髪を見てひどく驚かれて、急いで人払いをして下さった。

「修道院に行くって！？」

長椅子に並んで座るなり、王妃様は急きこむようにお尋ねになった。

「ちょっと、魔法庁の人間関係や男女のことに倦んでしまったので、己を見つめ直してみようかと」

用意していた台詞を並べると、「あなた何歳なのよ一体」と王妃様は黒い瞳をくるりと回す。僕は付け加えた。

「あ、王妃様みたいな素敵な出会いを諦めたわけじゃないです。聖職者や修道士にならなければ、結婚はできますし」

「そ、そう……アユルがそれでいいなら、私はいいんだけどね。長官は、何て？」
「ホッとなさってました。長官も後悔なさってたみたいです。良かったです、お互い納得して終わりにできて」
正直な気持ちを言って、僕は笑った。

子どもの頃から僕は、「可愛い」「女の子みたい」と言われて育ってきた。そんな僕が笑顔を向ければ、たいていの人――特に女の人は笑顔を返してくれた。だから、たとえ孤児院出でも僕は他の子どもとは違う、これからもずっと愛情を向けてもらえるんだと思っていた。
でも、それは子どもだからこそだった。こんな僕でも成長し、少しずつ大人になって行く。それなのに僕は、自分に向けられる視線の意味合いがだんだん変わってきていることに気づかないままでいた。甘えていたんだ。
そんな風に今まで来たから、実は年上の女性と付き合うのは長官が初めてじゃなかった。でも、抱き合っている最中にふと目が合った瞬間、急にわかったんだ。今、僕は「愛されていない」って。
そして僕がそれに気づいたことに、長官も気づいた。瞳って、気持ちを映すんだね。
「ごめんなさい、アユル」
僕の身体を放した長官の、後悔でいっぱいの瞳を見て、僕も自然と謝っていた。
「僕こそ、ごめんなさい」
甘えてて、ごめんなさい。

そして、これからどうしよう……って裏庭の東屋で一人考えている時に、王妃様に会ったんだ――。

僕は、手にしていた細長い箱を差し出した。

「王妃様が色々話して下さったおかげで、僕も今回のことを決められたんです。ありがとうございました。これくらいしかお礼ができないんですが……」
王妃様は両手で箱を受け取ると、尋ねるような瞳で僕を見てから開けた。中には、切り落とした僕の髪が入っている。魔法官見習いでなくなった僕にはもう必要ないな、と考えた時、これは王妃様に差し上げなくては、と思ったんだ。
「これ、アユルの髪……？」
「はい。噂で聞いたんですけど、王妃様は姿をくらます想像をなさるのがご趣味だとか」
「ええ？　趣味ってことになってるの？　まあいいけど」
苦笑いする王妃様に、僕は髪の束をすくい上げて見せた。
「それならこれ、カツラとかつけ毛に使えませんか？」

すると突然、王妃様は黒い瞳を輝かせて、髪の束ごと僕の手を握りしめた。
「ありがとうアユル！　いやもう逃亡するとしたらこの黒髪がネックになるのはわかってるのに、『一般女性と同じ首飾りをしたいわー』なんて言っちゃったおかげで『一般の人と同じ髪の色のカツラが欲しいわー』ってのは何だかあからさますぎて言い出しにくかったのよね、いやもう本当にありがとう！」

その時。僕の手と、髪の束と、王妃様の手が重なった場所が、ふわりと温かくなった。魔力の反応だ。
「あっ」
僕は目を閉じて、太陽の光を浴びるようにその波動を受けとめた。
手のひらに鳥のヒナをのせた時のような、軽いようで重い命の重みと、小さな鼓動が伝わって来た。これは……。
「どうしたの？」
動かない僕を心配して、王妃様がもう片方の手で僕の腕に触れた。

僕は目を開いた。いくらこの世界の魔力が今では儚いものになっていても、生命の息吹は間違いようがない。
唇を湿して、ドキドキしながら告げる。
「王妃様、もう夜の方、そんなに頑張らなくてもいいみたいですよ」
王妃様は少しの間、呆然としていた。そして、ちょっと口を開けたり閉じたりしてから、思わずと言った様子でお腹に手をやってから、こう言った。
「……それじゃ、しばらくお酒は飲めないわね」
僕は声を上げて笑ってから、ソファを降りて片膝をつき、王妃様の手の甲に口づけをした。
「おめでとうございます。遠くから、ご無事の出産をお祈りしています」

◇　◇　◇

実は、修道院に働きに行くというのは、王妃様や長官を心配させないための口実みたいなものだった。
もちろん実際に修道院に行ったし、そこで平和に暮らせたらそれで良かったんだけど、いくら気をつけていても自分の外見がこうである以上、俗世間でも修道院でも起こるべき事は起こってしまう。
あっという間に修道院を飛び出さざるを得なくなった僕は、とある街のとある店に行って雇ってもらった。以前付き合った女性から聞いていたその店では、僕のこの外見が商売道具にもなり、また自分を守る鎧にもなった。
さあ、今日も営業開始時間がやってきた。
扉から次々と入って来る女性たちに、笑顔で応対する。席に案内して、飲み物の注文を聞く。
しばらくして、大きなショールで頭と顔を覆うようにして隠した

女性が入ってきた。きっとこういう店に入るのが恥ずかしいのだろう。
僕は近づくと、ニッコリと笑いかけた。
「お帰りなさいませ、ご主人様」
その女性はハッとこちらを見ると、少し赤くなった顔で軽くこちらをにらんだ。黒い瞳……黒？
「修道院にいないから、探したわよアユルっ。何なのこのお店、『小姓喫茶『ひたむき』』って！」
僕は仰天して叫びそうになった。
「お……！！」
王妃様！

１１　堕天使の受胎告知（後書き）

明日は更新お休みします（逃げっ

【閑話】メイラーの分際で

その日泊まった宿には、客室に温水を引いた小さな浴室があった。俺は寝台に腰かけて、そこから水音がするのを落ち着かない気分で聞いていた。

現在、俺とシーゼ様は、元魔法官見習いのアユルを探して旅をしているところだ。そして、夫婦のふりをして、この宿に泊まっている。

◇　◇　◇

シーゼ様が突然俺の家を訪ねてこられた、その翌朝のこと。

自分の家にシーゼ様がいらっしゃる――そして本来なら同じ卓で食事を採ることなどないシーゼ様と俺が一緒に、とは。一体どういった運命のいたずらなのか。

戸惑いの消えない俺とは対照的に、シーゼ様は当たり前のように食事を終えられると、澄んだ黒い瞳をこちらに向けられた。

「ねえ、もしも私が犯罪を犯して逃げてるんだったら、大勢の追手がかかると思うんだけど、そうじゃない場合の追手ってどの程度のものだと思う？」

俺は、城に勤めていた頃の記憶を掘り起こしながら答えた。

「シーゼ様のお話では、祭司長のグレッド様は国王陛下の留守中に、数人の僧兵だけを従えてシーゼ様を聖堂におびき出し、元の世界に還そうとしたということでしたね」

「うん。しかも襟章からして、たぶん一番下位の僧兵が三人だけだった。彼らは何も知らずにあそこにいたと思う」

「ふむ……もしシーゼ様がそのままお還りになっていたら、彼らはそれを証明する目撃者になっていたわけだ。『王妃様はお心を病ま

れ、祭司長の手で元の世界に還られた』と」
　しかし、彼らはシーゼ様が還らなかった場面を見てしまっている。それはグレッド様にとってはばらされたくない事実だろうな。彼らはどうなったのだろうか。

「グレッドが私に追手をかけようと思ったら、信頼できる部下をこっそり動かすしかないよね？」
　そうつぶやくシーゼ様に、俺は考えながら答えた。
「その場合は、聖堂騎士団の祭司長直下の隊を使うでしょうね。全員を動かすと目立つので、せいぜい十人弱……。いや、もしかしたら、まったく関係のない傭兵などを雇うということも考えられる」
「え、そんな外部の人に、王妃が逃げたから捕まえてくれなんてしゃべっちゃう？」
「こう言えばいいのです。『王妃様のふりをして髪を黒く染め、王家の権威を失墜させるようなことを企む輩がいるから捕まえろ』」
　シーゼ様は手をポンと打った。
「なるほどー。って、感心してる場合じゃないや、それなら結構大々的に人を動かせるじゃないの！」
「いえ、大々的には無理でしょう。国王陛下にはシーゼ様の不在を隠してはおけませんから、おそらくグレッド様は陛下には『王妃様は元の世界に還られた』ということにしているはず。その上でシーゼ様を捕えようとなさるのなら、やはり密かに動くしかありません」
「そっか。じゃあ一番あり得るのは、傭兵を何人か雇って『王妃のふりをした女がいるから、模倣犯が発生しないように密かに捕まえろ』って感じ？」
「御意」

「じゃあ日本にいたころみたいな感じで注意すればいいのかな、基本的に……」
　シーゼ様はふむふむとうなずきながら立ち上がると、部屋の隅の

寝台に腰かけて黒髪が見えないように髪をまとめ直し、つけ毛をつけた手巾をかぶりながら頷かれた。
「とにかく、なるべく目立たないようにしないとね。やっぱりメイラーがいてくれて良かったわ、女一人旅は目立つけど、夫婦で旅をするならそうでもないもんね」
「は？」
「私とメイラーが夫婦のふりをするのが、一番目立たないでしょ？」

◇　◇　◇

――というわけで、もう一度言う。
俺とシーゼ様は夫婦の、そう『夫婦』の！　ふりをして、宿で同じ部屋に泊まっている。
これが心穏やかでいられようか、いやいられるはずがない！

「あーさっぱりした。メイラー、次どうぞ」
シーゼ様が布で髪を適当に拭きながら、浴室から出てこられた。
俺は思わず視線を泳がせた。ぬ、濡れ髪……シーゼ様の黒く艶やかな濡れ髪。
城ではシーゼ様の入浴後、おそらく侍女たちがすぐに髪を乾かしていると思う。つ、つまり、国王陛下さえシーゼ様の濡れ髪を目にすることはあるかないか……っ。それを今、俺が！
「どうしたの？」
寝台に腰かけたシーゼ様がこちらを見たので、俺は少し離れた場所で片膝をついた。
「いえ、その……俺は無骨者ゆえ、どのようにシーゼ様のお手伝いをしたらよいのか皆目検討がつきません。侍女のようには至りませんが、俺にできることがあれば何でもお申し付けください」
「ありがとう。でも大丈夫、日本では全部自分でやってたから」
シーゼ様はにこりと笑った。

「むしろこっちがお礼したいくらいだもん、もう王妃付きの騎士じゃないのに付き合ってくれて。ここに調理場がついてたら、メイラーに美味しいご飯くらい作ってあげるのにな」
し、シーゼ様お手ずから、食事を……！？
「あ、それより足は大丈夫？　マッサージとかするなら手伝えるよ？」
「ぐはっ。い、いえ、今日は痛みません」
俺はすっくと立ち上がってみせた。本当は、全く痛まないわけではなかったが。
「そう？　じゃあとにかく、お風呂ごゆっくりどうぞ。……あっ」
シーゼ様は、まだ湯のほてりの残る紅色の頬のまま、上目遣いで俺を見た。
「でも何かあったら怖いから、浴室の扉は少し開けておいてくれないかな……？」

れ、連続攻撃か……っ。
俺は胸の鼓動を意識しながら答えた。
「いえ、俺は拭くだけにしておきます。ただでさえ万全にシーゼさまをお守りできない身体ですので、ゆっくり風呂に入るのはせめてアユルと合流してからに」
交代要員もいないのに、無防備な状態になるわけにはいかない。俺なりの矜持だ。シーゼさまもそれはわかって下さったようだ。
「そっか、わかった。じゃあせめて背中……あ、いや何でもない、ごめん」
言いかけたことをシーゼさまは慌てて打ち消したが、俺はすでに想像してしまっていた。
俺の裸の背中を、シーゼ様が優しく拭いて下さっている姿を！
シーゼ様は苦笑いなさり、
「ごめんごめん、節操ないこと言ったね。あーもう、これじゃアユルに『こんなことしちゃダメ』なんて言えないよねホント……さて

もう寝ようかなー」
と話を終わりになさったが、俺はさらに想像してしまっていた。
あの美少年がどんなダメなコトをしたって！？
俺は浴室に入ると、まずは頭に冷たい水をぶっかけたのだった。

【閑話】メイラーの分際で（後書き）

タイトルが可哀想すぎると思った方、メイラーに応援よろしくお願いします。

１２　それぞれの仕事（前書き）

お気に入り登録２，０００件突破、そして前話のメイラーに応援ありがとうございます！

12　それぞれの仕事

城下街に次ぐ規模の街、エングル。大きな噴水のある広場は彩色されたタイルで美しく舗装され、荷車や馬車が賑やかに行きかっている。広場に面した店はどこも華やかに装飾され、大勢の客が出入りしていた。

俺は道端のベンチに腰かけて公報紙に目を通しながら、とある店の様子をそれとなく窺っていた。あの店に入るには、俺は場違いすぎて目立ってしまう。店の看板には「小姓喫茶『ひたむき』」という文字……男が入って悪いことはないのかもしれないが、やはり女性客が多いようだ。

「？」

ふと、俺は目だけを動かしてあたりの様子を窺った。今、俺のように何かを監視しているような視線を感じた気がしたのだが……気のせいか？

いや、用心するに越したことはない。怪我をきっかけに故郷に戻ってしばらく経つ俺は、実戦の勘が完全には戻っていない自分を信用することができない。少しでもおかしいと思ったら、用心するべきだ。

さりげない動作で読み終わった公報紙をたたみ、上着の内側の隠しにしまいながら立ち上がった時、店から二人の人間が出てきた。シーゼ様と、そして……。

「あー、本当にメイラーさんだ！」

元・魔法官見習いの少年、アユルだった。くせのある髪をあごの線で切りそろえた彼は、少し背も伸びて以前のような少女っぽさは薄れていたが、やはり美しい見目をしていた。

「お話するのは初めてですよね、アユルと言います。よろしくお願いします」

礼儀正しくあいさつする少年に、俺もあいさつを返す。
「メイラーだ。そうか、王……シーゼ様の元で働いていた時期は少ししか被っていないんだな」
「はい、僕の方が先に辞めてしまったので。でもシーゼ様のお部屋の前で、よくすれ違いましたよね。あ、立ち話も何なのでこちらへどうぞ。僕ちょっと休憩もらってきたので」

アユルの案内で店の裏手に回ると急な外階段があり、三階まで登った。隣の家の壁がすぐそばまで迫っていて窮屈に感じられたが、シーゼ様は
「ここ逃げやすそうね、屋根とか伝ってさ」
とあたりを見回している。
たどり着いた扉を開けると、廊下も何もなしにすぐ部屋になっていた。両側の壁に沿って置かれた二つの寝台の間に小さな机と椅子、棚が一つ……それでほとんど一杯の部屋だ。アユルが小さな窓を開けて風を通しながら、
「僕と同僚が住んでいる部屋です。狭くて申し訳ありません、でもゆっくり話ができるので」
「何だか落ち着くわ、この広さ。どこにでもすぐに手が届くのがいいのよね」
シーゼ様が部屋を見まわして褒めている。本当にそう思っているらしい。

シーゼ様とアユルは椅子の一つと寝台にそれぞれ腰かけ、俺は椅子を一つ借りて開け放したままの入口の扉から外を窺える位置に座った。念のためだ。
「王妃様、まさか姿をくらます想像を実行に？　本当にお城から出てこられるなんて」
まさか本当にシーゼ様が逃亡中だと知らないアユルは、面白そうに言った。場所が場所であるし、シーゼ様もごく普通の街娘の格好

なためか、ややくだけた口調になっている。
「でも、お忍びで僕を訪ねて下さるなんて嬉しいです。よくここがわかりましたね」
「あー、うん。一度は修道院に行ったのよ、山道を馬でえっほえっほ登ってさ。それでたどり着いてみたら、アユルはもう辞めたって聞いて」
シーゼ様は何から話していいか迷っているようで、ちょっと視線を泳がせている。
「院長様に、アユルがこの街にいることを教えていただいたの」
「あ、僕、院長様にはこの街で仕事を見つけたことを手紙で知らせてありましたからね……でも、よくすんなりと教えて下さいましたね」
「この髪のおかげ」
シーゼ様がショールを取ると、アユルの髪で作ったつけ毛の三つ編みが現れた。
「院長様って、魔力を感じ取る力がおありなのね。すぐにこれがアユルの髪だって気がつかれて、『アユルが髪を渡した方になら』って教えて下さったんだ」

俺は二人の会話を聞きながら、その時のことを思い出す。あの時はひやりとした……つけ毛に気づかれたということは、シーゼ様が髪色を隠しているとバレたということだからな。しかし院長はそのことには触れず、シーゼ様と俺をじっと見つめて微笑んでいらっしゃった。

「後は、このエングルの街で評判の美少年を探せばいいわ、と思って街の人に聞いてみたら、『美少年がお望みならあの店がいいよ』って勧められちゃった」
肩をすくめるシーゼ様に、アユルはからからと笑うと寝台から降りて片膝をついた。

「王妃様になら僕、最高のおもてなしをさせていただきます」
芝居がかった動作で片手を胸に当て、頭を下げるアユルに、シーゼ様は両手を胸の前でぶんぶんと振った。
「やめてよもう！　お城にいる時はこんなもんかと思ってみんなにお世話してもらってたけど、街のああいうお店に入るのはすごく恥ずかしかったんだから」
アユルははずみをつけて、寝台に座り直した。
「ふふ、そうですか。でもおかげ様で、結構楽しく働かせてもらってます」
「本当？　辛いことはない？」
「はい。僕、考えたんです」

アユルは素直な瞳でシーゼ様を見つめた。この少年、城にいた頃よりも明るい表情をしている気がする。
「この外見に甘えていないで、まずは他にもこういう外見をしてる人の中に混じってみようって。そこから僕だけの個性っていうか、僕だけにできることが見つかるかもしれないし。見つからなかったらそれはそれで、埋没するのも楽かなって」

「なるほどね。それで、今のところはどう？」
シーゼ様がどこか優しい声音でお尋ねになると、アユルはちょっと困ったように笑った。
「それが僕、かなりの売れっ子になっちゃったんですよね」

なんかこいつムカつくぞ。俺はげっそりしたが、シーゼ様は大笑いされている。
「あはははは、それじゃあもう開き直るしかないわね！　強引なお客さんとかいない？」
「そういう人は出入り禁止になっちゃうんですよ、この店。だから今は、一生懸命稼いでます。いつかやりたいことが見つかった時の

資金ですね」
「うんうん、お金のために働くのも大事なことだよね」
うなずいたシーゼ様は、何かを思い出す表情をされた。
「私も日本にいた頃は、いつかパーッと使ってやろうと思いながらお金のためにだけ働いてたなぁ。やりたい仕事はできなかったから」
「王妃様がおやりになりたかった仕事って、何ですか？」
アユルが興味津津に尋ねると、シーゼ様は含み笑いをなさった。
「内緒……」
「うわ、よけい気になりますよそれ」
「え、いやー、恥ずかしいな。まあいいか、あのね」
ちょっと小首を傾げた動作に照れを滲ませて、シーゼ様はおっしゃった。
「絵本作家。えへ」

――俺とアユルは素早く視線を交わし合った。
シーゼ様はギロリと俺たちを見た。
「ちょっと。今の視線の意味はイルフレートなしでもわかるわよ。『こいつの書いた絵本なんか子どもに見せられるか？』『無理だね』って意味でしょ、ふん」
「そ、そんなとんでもない！」
「きっと斬新なものを書かれるのでしょうね！」
あわてて表面を取り繕う俺たちに、シーゼ様はもう一度鼻を鳴らしてから、パンと手を打ち合わせた。
「さて……と。アユル、実は私、聞きたいことがあってここに来たの」

13　帰還陣の謎

帰還の魔方陣についてアユルに聞くためには、事情を話さないわけにはいかない。巻きこむようで心苦しかったけど、私はあったことをそのままアユルに話した。

「感じ悪いと思ってたんですよ、あの祭司長」

話を聞いたアユルは、さっくりと言った。口調はさっきまでと変わらないけど、あらら、目が笑ってないよ。

「いくら王太后様に取り立ててもらって祭司長になったからって、フェザリオン陛下よりも王太后！　みたいな空気作ってるのあの人じゃないですか？　それに何かと言うと、王ひ……シーゼ様のことちらちら見てて、見張ってるみたいで嫌だったな僕は」

「そ、そうだったの？」

珍しく剣呑な雰囲気のアユルに、私はちょっとタジタジ。

「結論から言います」

アユルは私をまっすぐ見て言った。

「シーゼ様を元の世界に還すのは、今の時点では不可能だと思います。シーゼ様が追い込まれそうになったのは、帰還の陣じゃない」

「根拠は？」

すぐに戸口の方からメイラーが言葉を投げた。アユルはメイラーと私を交互に見ながら説明する。

「百十代目の国王妃を召喚した数年後に、もう百十一代目の国王妃を召喚しなくてはならなかった時の話は、どなたかからお聞きになりましたか？」

「ん？　九十九代と百代じゃなかった？」

まあどっちもキリ番ゾロ目が連続で来ちゃった例だから同じか。

「ああ、『悪夢の二年間』ですね」

魔法庁ではそんな呼び名で語り継がれているんですか。

「その時はちょっと特殊でしたね。九十九代目の国王妃を召喚した直後、九十九代国王が急な病でお亡くなりになったので、次の百代国王妃をすぐに召喚しなくてはならなくて悲惨なことになったんです。ギリギリの魔力で召喚したものの、成人女性ではなく赤子が召喚されたとか」

……それはひどいな。誰にとっても、ひどい。何でそこまでして。

「でも百十代と百十一代の時は、『悪夢の二年間』の教訓もありましたし数年の間がありましたので、準備ができました」

「準備？」

「はい。魔力を受けとめて練ることのできる素質を持った人間を、魔法庁が数年前から大量に雇い入れていたからこそ、ごく普通に魔力を溜めて召喚を行うことができたんです」

黙って聞いていたメイラーが、口を挟んだ。

「言われてみれば、その頃は隣国ダーナディルスとの関係が緊張状態にあったこともあって、あらゆる不測の事態に備えておこうという空気があったようです。極端な話ですが、当時の国王が戦で急に戦死する可能性さえ考えて、次の召喚の準備をしていた。しかし今は……」

「はい。平和ボケして緩みきってますからね、王家は」

アユルは腕を組んだ。

「魔力の備蓄なんか、帰還の陣を作れるほど大量にあるわけないんです。それだけの魔法官だって揃ってない。シーゼ様を還すのは、まず無理ですね」

「じゃあ、グレッドは何で元の世界に還すなんて……」

つぶやく私。アユルも考え込んでいる。

「その場にいた僧兵たちに、シーゼ様が還るところを見せようとしたんですよね？　それなら、シーゼ様をどこかに移動させようとしたのは間違いないと思うんですが」

移動……どこへ？

その時、開け放していた窓から鐘の音が聞こえてきた。アユルが顔を上げる。

「あ、『ソレスの帰還』の鐘だ。すみません、僕そろそろ休憩時間が終わりなんです」

ソレスというのは、この世界の太陽神の名前だ。この世界には四人の神様がいて、“太陽神”ソレス、“星と夜の神”ニュイスが兄弟神。それと、“暁の女神”ドイリと“黄昏の女神”シャンピがいる。

一日の時間はこの四人の神様にちなんで四つに分けられていて、『ソレスの帰還』っていうのは太陽の神様がそろそろ家に帰る時間っていうことだから、だいたい午後の三時くらい。ややこしいな、この世界に来て最初のうちはイルフレートが地球時間に訳してくれてたんだけど、私がだんだんこっちに馴染んできたら訳してくれなくなっちゃって。

「あっ、忙しいのにごめん。休憩時間使わせちゃったね」

私が急いで立ち上がると、アユルはニコニコした。

「休憩時間にシーゼ様とずっとお話できるなんて、嬉しかったです。まだこの街にいらっしゃいますか？」

言われた私がメイラーを見ると、彼は

「まだお聞きになりたいこともおありでしょうし、事態の急変がなければもう少しここに滞在しましょう」

とうなずいた。良かった、そうしたかったんだ。

「今日は何時に仕事終わる？」

聞いてみると、アユルは

「うわあ、王妃様と待ち合わせですか！」

って瞳をキラキラ。うわー、そりゃあんた、売れっ子にもなるよ。

「夜、私たちの泊まってる宿に来れない？　メイラーをお風呂に入れてあげたくて」

「？？？」
疑問符を飛ばしているアユルに、私はメイラーが私の警護のためにゆっくりお風呂に入れていないこと、彼がお風呂に入ってる間アユルに私のそばにいて欲しいことを説明した。メイラーは後ろで「あ」だの「う」だの言っている。まーまー、照れるなよ。
「僕なんかで警護の代わりになるかな……まあ、誰もシーゼ様のおそばにいないよりはいいですよね」
アユルはうなずいてから、何やらニヤニヤしてメイラーを見た。
「そうですよね、ずぅーっとシーゼ様と二人っきりだったんですもんね。大変でしたねメイラーさん」
メイラーは苦虫をかみつぶしたような顔をして、黙り込んでしまった。なんであんな顔してるんだろう？

14　追手

「それじゃ、後で宿の方に伺いますね！」
一緒にお店の前まで行くと、アユルはそう言って元気よく仕事に戻って行った。私とメイラーも、宿に向かって歩き出す。
エングルの街はメインの通りにモザイクタイルが敷かれていて、華やかですごくきれいだ。ここはさっき話にも出た隣のダーナディルス王国との交通の要衝になっていて、通行手形の発行を待つ旅人を当て込んだ商売人がたくさん集まってるんだって。そんな街で小姓喫茶とかやっちゃう『ひたむき』の店長、思い切ったことするな。

赤ちゃんを抱いた女の人を見かけて、ちょっと目で追う。――ウィンガリオン、元気にしてるかな。私なんかより、よっぽど乳母さんが上手にお世話してくれてるとは思うけど。
少し物思いに沈んでいたら、メイラーに軽く腕を引かれた。そのまま道の端に避けると、前方からガッチャ、ガッチャという音。カーキ色の制服を着た警備兵が歩いて来ていて、腰に佩いた長剣が重そうな音をたてているのだった。
そう言えば、とメイラーに目をやると、彼の腰にも長剣がぶら下がっていた。こっちの世界では、彼みたいに私服姿の人が往来で剣を持って歩いていてもおかしくはない。休暇中の兵士か、何かの用心棒かと思われるだろう。

この街では中の上といったランクの宿屋に到着して、客室に入った。メイラーは窓を開けてあたりを見まわし、もう一度閉めてから、帯ごと剣を外してテーブルに置いた。
「剣って、結構重たいんでしょ？　足に響かない？」
聞いてみると、彼は苦笑いしながら剣を鞘から抜いて見せた。
剣は、鞘の半分の長さしかなかった。

「申し訳ありません、鞘はハッタリです。おっしゃる通り長剣はかなり重く、ただでさえ左の靴の方が右よりもすり減るほど左足に負担がかかる。しかし追手になめられるわけにはいかないので、見かけだけはこのようにしてあります」
「へぇ、工夫してるんだ」
私は思わず、剣を持たせてもらったり鞘をのぞいたりしてしまった。メイラーはニヤリと笑って、
「これを補う武器はちゃんとありますので、ご安心を」
だって。足を痛めていても、メイラーは頼もしいボディーガードだと思うわ。

「ところでシーゼ様、これを」
彼が上着の懐から出したのは、公報紙だった。数日に一回発行されるそれは警備隊が無料で発行していて、自警団の詰め所や小聖堂など公的な場所で配られている。わら半紙にガリ版刷り――あ、謄写版って言うんだっけ。そんな感じの新聞だ。
文字はだいたいわかるので、私は目を通した。日本にいた頃、外国の人が日本語学校で勉強すると約一年半で生活に困らない程度に読み書きできる、と聞いたことがあったので、一年半だなよし負けるもんかー！　と思って勉強したんです。負けず嫌いなもので。
「あ、私のことが書いてある。『王妃が体調を崩したので、しばらく公務は控える。王太子のお披露目式も延期』……あーっ、そうだウィンガリオンのお披露目式やる予定だったっけ！」
忘れてたよ、せっかくハーヴの民の皆さんに息子を見てもらおうと思ったのに。って問題はそこではなくて。
「王妃が元の世界に帰った、とは書いてないね。対外的には隠すつもりなんだ」
「ひとまずは、ですね。どう発表するか協議中なのでしょう。……もしかしたら、国王陛下かどなたかが、祭司長の言い分を疑っていらっしゃることも考えられますが」

メイラーの言葉に、私は夫の顔を思い浮かべた。
フェザーはあんまりやる気のない王様だけど、物事をよく見ている。……疑ってくれるかなぁあの人。
そう考えた時、私は初めて気がついた。私、「夫とグレッドがグル」っていう風には考えたことがないな、って。
あり得ないわけじゃないよね。夫は国王なんだから、世継ぎが生まれて用なしになった異世界の女をどこかへ片付けて、妻にするメリットのあるどこかの美姫を正妃にしてウハウハ、っていう可能性も。

ぷっ、と笑いだした私を見て、メイラーが不思議そうな顔をしている。
ないわ、ないない。あのフェザーが。私は、ウィンガリオンが生まれた時のことを思い出した。
陣痛にパニックになった私が、
「もうやめる、もう逃げる！　ギャー！」
って叫んでるのを別室で聞いていたフェザー、自分も青い顔をしてお腹を抑えてたって、後で聞いたんだ。そんな繊細なフェザーが、この私に隠れて陰謀をめぐらせられるわけがない。
ちなみに私はその時、国家体制批判（「これやらせるために召喚！？　ふざけんなー！！」）やら国王に対する暴言（「こんな目に遭うのフェザーのせいだ、一生恨んでやるー！！」）やらも叫んだらしく、フェザーだけでなく医者も産婆も青くなってたそうな。私は覚えてないんだけど、まあこれも済んでしまえば楽しい笑い話よね。

宿の食堂で簡単に夕食を済ませ、再び客室に戻る。鐘の音が聞こえて窓の外を見ると、ずっと遠くの山の端に夕陽の残照が残るばかりで、夜空には星が瞬き始めていた。今のは“黄昏の女神”シャン

ピの帰還の鐘だから、だいたい夕方の六時過ぎってところかな。これからは“星と夜の神”ニュイスの支配する時間になる。
「そろそろ、アユルが来るかな」
私が言った時、廊下から足音が聞こえて部屋の前で止まった。トントン、とノックの音。
「こんばんは、僕です。お約束もないのに、すみません」

アユルの声に、私はメイラーと顔を見合わせた。『お約束もないのに』？　ちゃんと約束したじゃん。
一瞬の後、はっとした。アユルはおそらく誰かと一緒にいて、その人物に気づかれないように私たちに警告してくれているんだ。約束もしていない、不躾な客人がここにいるよ、と。
メイラーがテーブルの上の剣を手にしながら、扉に向かって言った。
「ちょっと待ってくれ、今彼女が服を着るから」
どういう設定よ、と思いつつ、私はスカートをはいているのも構わずそっと窓を開けて窓枠に足をかけた。何かあった時のためにメイラーが隣の客室も取っておいてくれているので、私は窓からそちらへこっそり移って身を潜めればいい。メイラーを置いて行くのは心配だけど、相手が私を狙った追手なら、私が姿を消してしまうのが一番だからね。
でも、残念ながらこの手は使えなかった。私は上げていた足を元に戻して言った。
「メイラー。外にも誰かいる」
ちっ、とメイラーの舌打ち。しょうがない、見つかっちゃったら人数ではどうしたって負ける。
私は開き直ると、彼に言った。
「アユルが心配だわ。扉を開けて」
メイラーが抜き身の剣を構えたままレバー式のロックを外し、私の斜め前まで下がった。

向こうからゆっくりと扉が開くと、そこには悔しそうなアユル。そして、そのすぐ後ろに背の高い男が一人立っていた。逆立てた短い白髪、そしてごく薄い紫の瞳の男は、あごから肩にかけて大きな布を巻きつけたような格好をしていて口元が見えない。

男は無表情のまま、アユルを押して中に入って来た。たっぷりした袖口の手をアユルの肩というか首の近くに置いているのは、たぶん何か武器を持ってるんだろう。でも、殺気どころか緊張感さえない様子……きっと、唸り声を上げる猟犬よりも、爪を隠した鷹の方が怖い。

彼はそのまま軽く目礼すると、低くこもった声で言った。

「お迎えに上がりました、王妃様」

15　懐妊報告の優先順位

「先ほど、陛下が小聖堂にお見えになっていらっしゃいましたよ」
事務仕事をしている修道士の言葉に、私は立ち上がると祭司長室を出た。石畳の回廊を行く歩調が、自然と早くなる。
すでに“ニュイスの目覚め”の時刻で、等間隔で壁に穿たれた燭台用の穴から明かりが広がっていた。その先の階段を上りながら見上げると、聖句の刻まれた小聖堂の扉が見える。両開きの扉は片方が開いたままになっており、水晶で作られた壁は外気との差で少し曇っていた。中に灯された燭台の火で、あたりはぼんやりと明るい。
声が天井に反響して聞こえてくる。私は中からはこちらが見えない位置で立ち止まると、耳をすませた。
「ここから、妃は元の世界に還ったのだな」
陛下の落ち着いた声に、おそらく僧兵の誰かの声が答える。
「はい。祭壇の前のこのあたりに、陣が開かれてございまして」
「妃の様子はどうだった」
「動揺していらっしゃるようでした。無理もないことです……」
「帰還の瞬間は見たか？」
「王妃様が陣の中へ飛び込まれ、陣が強く光りました。一瞬何も見えなくなり、少しして目を開くと、王妃様はすでにいらっしゃいませんでした」
「そうか。わかった」
私は身をひるがえして階段を少し下り、暗がりに身を潜めた。複数の足音……おそらく陛下とそのお付きの者が小聖堂から出ていったのだろう。石畳を踏む足音は、すぐに遠くなった。
小聖堂まで確かめに来るとは……陛下は、疑っていらっしゃるのか？　王妃が本当に、元の世界に戻られたのかどうかを。
しかし今の話では、王妃の行動に気づいた私が急いで陣を発光さ

せて僧兵たちの目をくらませたことは、疑いこそすれ確証は持てまい。まさか祭壇の奥に王族専用の逃走経路があったとは思わなかったが――そして陛下はその経路をご存じだろうが、確証をお持ちになれなければ同じだ。

王妃の逃亡後、密かに私一人で祭壇の下へもぐって通路を探索した。そして、いくつかあるつきあたりの一つに王妃のドレスが打ち捨てられているのを見つけて愕然とした。

ドレスを脱いだということは、着替えが用意してあったということになる。何と周到なのだ。

あのお方は予想外の行動をお取りになる……見つけ出すことはできるだろうか。私は再び祭司長室への道をたどりながら、王妃のことを思い出していた。

◇　◇　◇

王妃が私をお呼びになっている、と聞いて、ある暖かな日の午後に王妃の部屋へ出向いた。結婚式のしばらく後のことだ。

彫金によって蔓草の模様を浮かび上がらせた豪奢な扉にたどり着き、中に入ると、そこは控えの間になっている。すぐに侍女に取り次がれて次の間に入った。

王妃は――出窓に腰かけて本を読んでいらした、らしい。よいしょと床に降りて、靴を履いているところだった。

「早かったのね、祭司長」

「……王妃様。本は椅子でお読みになって下さい」

一言言うと、

「さっそくお小言来たー。だってこの部屋だと、あそこが一番落ち着くんだもん」

とドレスの裾を直しながら受け流された。

「窓から逃げやすいからですか」

私が少し呆れて言うと、王妃は両手の人差し指で私を指さして「言うよねー」とニヤリと笑ってから、
「いやいや、祭司長考え過ぎ。単に、本を読んだり窓から外をぼーっと見たりできるのが幸せなだけ」
とおっしゃった。勘ぐりすぎるのは私の悪い癖だ。
その王妃の手の片方、人差指以外の指で持っていた本に見覚えがあった。それは王妃を召喚してすぐ、この世界のことを知っていただくために私が差し上げた、神話をわかりやすく描いた絵本だった。
「私、絵本好きなんだよね」
王妃は私の視線に気づき、両手で本を軽く持ち上げる仕草をした。脇の小卓で茶の準備をしていた年かさの侍女が、
「多くの方から数々の贈り物が届きますのに、王妃様はその絵本ばかり手に取っていらっしゃいますわね」
と笑う。思わず王妃の顔をまっすぐ見ると、王妃は「だって」と絵本を開かれた。
「こっちの神話って、可愛らしいから」

「可愛らしい……ですか」
“太陽神”ソレスと“星と夜の神”ニュイスの兄弟は、大昔に大喧嘩をしたせいで昼と夜に分かれて会わなくなっちゃったんだけど、実は仲直りしたいと思ってるところとか。それで、朝と夕方に“暁の女神”ドイリちゃんと“黄昏の女神”シャンピちゃんが入って、昼と夜、兄と弟の仲を取り持ってるんでしょ。この女神様も、女神って言うより妖精っぽくてきゃらきゃらしてて、なんか可愛い」
……王妃は元の世界では、特に信仰している宗教はなかったそうだ。その視点でこちらの神話を眺めるとそうなるのか。
「それに、こっちの神話ってすごく一般の人に寄り添った内容だと思う」
王妃はお続けになった。
「一日のうち、ソレスの時間とニュイスの時間は長いけど、ドイリ

の時間は明け方から陽が昇るまでだし、シャンピの時間は陽が暮れて沈むまでだから短いよね。ドイリとシャンピは、起きてから短い時間で色んな事をして、次の神様に世界を譲る。朝と夕方が忙しいのって、まさに庶民の生活だよね」

私は舌を巻いた。確かに朝夕の城下では、「急がないとドイリ様がご帰還になるよ」「もうシャンピ様がお目覚めだ」などといった表現が人々の口に頻繁に上る。王妃はその感覚を、私が差し上げた絵本からすでに読み取られていらっしゃるようだ。

「他にも色々と裏読みできて面白いんだ。ありがとうグレッド」

急に気安げに礼を言われ、私は黙って目礼した。どうもこの王妃と話していると、調子が狂う。

「ところで王妃様、今日はどのようなご用件で……」

言いかけたその時、先触れがあって、国王陛下が部屋にお見えになった。近衛騎士団長も一緒だ。

「祭司長も来ていたのか。シーゼ、何か用があると聞いたが」

「うん、あと一人来たら……あ、来たかな」

王妃が扉の方を見ると、女官長が「遅くなりまして」と急ぎ足で入って来て礼を取る。侍女が茶の準備を終えて部屋を出て行った。

これは……召喚の時にその場にいた四人か。

王妃はいきなり立ち上がると、こう言った。

「本日はお忙しい所をお集まりいただきまして、ありがとうございます。召喚という国家的大事業の中心を担った方全員に、ご報告があります」

「全員に？」

陛下が聞き返すと、王妃は笑ってうなずき、何やら片手の指を二本お出しになった。

「できたよー、赤ちゃん」

それはやはり優先順位として夫に最初に申し上げてはいかがか！

！！

とその場の全員が思ったことだろうが、とりあえず陛下以外の三人はその場に膝をついて

「おめでとうございます」

と口を揃えた。めでたいことには違いなく、女官長などは頬を紅潮させている。

陛下は「うむ……そうか」「よくやったな」などと口の中でおっしゃっていたが、後に

「余もそれなりに、妃が妊娠したらどう言葉をかけるか考えていたのだが、出鼻をくじかれたな」

と苦笑していらっしゃった。少々お気の毒だ。

それはともかく、この懐妊報告の際に王妃が付け加えた一言を、私は覚えていた。

「最初に気づいたのはアユルなんだけどね……あ、いやいや」

……「アユル」？　聞いたことがあるような気がする名だが……。

◇　◇　◇

王妃が姿を消してしまわれ、逃亡先を考えた時に思い浮かんだのは、王妃を守った際の負傷で退役した男のことと、王妃が口にした「アユル」という名前だった。調べるとすぐに、魔法庁で働いていた魔法官見習いの少年だと知れた。

祭司長室の前まで来て立ち止まった時、廊下の奥で闇がかすかに動いた。私はそのまま動きを止めた。

「発見しました。仲間も二人おります」

闇の中から、短くひそやかな声。

「わかった。言った通り手荒な真似は決してせず、例の場所に案内

せよ。私も明日には合流する」
指示すると是の返事があり、再び闇は静かにわかだまる。私は扉を開こうとして、手のひらに汗をかいているのに気づいた。
明日、王妃は私に、どのような視線をお向けになるだろうか――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1247y/

王妃様は逃亡中

2011年11月21日23時26分発行